

19世紀末アメリカにおける産業看護の起源

——創成神話の成立とその歴史的背景——

上野 継義*

今日、正看護婦の就いている専門領域には有益な仕事
が数多あるが、その中でもっとも魅力的かつ重要な
が工場看護婦（factory nurse）の仕事である。

—オーガスタ・コンディット¹⁾

目 次

1. 産業看護の起源
2. 百貨店のマトロン
3. 新しい起源を求めて
4. 産業看護婦像の変容
5. 創成物語の非神話化

1. 産業看護の起源

アメリカ合衆国において産業看護（industrial nursing）はいつどこで始まったのか。版を重ねている公衆衛生看護学テキストは、この問いに対して、ほぼ例外なく次のように答えている。19世紀にビジネスの世界で活動していた看護婦は5人だけである。1888年にペンシルヴェニア州の炭鉱会社グループに雇用されたベ

ティ・モウルダー（Betty Moulder）、次いで1895年にヴァーモント州の大理石製造業で雇用されたエイダ・スチュワート（Ada Mayo Stewart, 1870-1945）とその妹ハリエット（Harriet Wyman Stewart）、1897年にニューヨーク市の百貨店で働いていたアナ・ダンカン（Anna B. Duncan）、最後に、名前は分らないが1899年にブルックリンの百貨店に勤めていた看護婦がいる。これが通説である。²⁾

*上野 継義（Tsuguyoshi UENO）：京都産業大学教授（ueno@cc.kyoto-su.ac.jp）。博士（経営学，中央大学）。「アメリカ人事管理運動と『人間工学』の諸相——人間工学ブームの盛衰——」福島大学『商学論集』第83巻第4号（2015年3月）：93-118；第84巻第1号（2015年6月）：39-68；「産業看護婦による移民のアメリカ化——安全運動と訪問看護運動との協働——」『医療化するアメリカ——身体管理の20世紀』平体由美，小野直子編（彩流社，2017年）。

¹⁾ Augusta M. Condit, “Nursing for Corporations,” *American Journal of Nursing* 10, no. 10 (July 1910): 747.

²⁾ 通説は米国で版を重ねているテキストや近年の論説から容易に確認できる。Marcia Stanhope and Jeanette Lancaster, *Public Health Nursing: Population-Centered Health Care in the Community*, 9th ed. (St. Louis, Missouri: Mosby, 2015), 939; Karen Saucier Lundy and Sharyn Janes, *Community Health Nursing: Caring for the Public's Health*, 3rd ed. (Burlington, MA: Jones & Bartlett Learning, 2016), 944-45; Margaret C. Thompson, “Occupational Health Nursing in the United States,” *Workplace Health & Safety* 60, no. 3 (2012): 127.

だが、思いつくまま連邦労働省の報告書や業界誌などを調べてみると、19世紀にビジネスの世界で働いていた看護師は、地理的にも、産業的にも、広い範囲でみられ、名前の特定は困難だが、多くの事例をすくい上げることができる。³⁾ また、鉄道業および鉱山業を中心に南北戦争後から病院建設を進める企業が存在したことは早くから知られており、そこに看護婦が雇用されていたであろうことも十分に予想可能である。⁴⁾ となると、当然のことながら、この通説は何を基準にして看護婦を選び出したのか、典拠史料として何を用いたのか、そもそも誰がこの通説をまとめたのか、素朴な疑問が次々と湧いてくるのである。

創成物語の特徴 調査の結果、次のことが判明した。ビジネスの世界で働く看護婦を“industrial nurse”と呼んだのは、訪問看護運動（visiting nurse movement）のリーダーたちであり、1910年代に入って間もなくのことであった。ここで“industrial nurse”と原語

で記したのは、この言葉に込められた思想に着目したいからである。訪問看護リーダーたちは、19世紀の末葉から、公衆衛生看護——当時は英国の先達に倣って“district nursing”や“visiting nursing”と言っており、“public health nursing”という言葉はなかった——の仕事を一個の専門職として確立する方向で行動しており、1910年代に“industrial nursing”をその一分枝として位置づけることになる。正規の看護教育を受けた正看護婦が公衆衛生看護の仕事に就くべきであり、しかも看護はマターナルな感性によって支えられる女性専門職（women’s profession）であるとの強い自負があった。したがって、彼女たちの思いを汲んで“industrial nursing”の語を訳すならば「正規の看護教育を受けた女性がたずさわるべき専門職業としての産業看護」であり、“nurses”は女性名詞ということになる。そして、彼女たちが1916年頃に“industrial nursing”の起源探しをはじめた時、この理想像をそのまま過去に投影して19世紀の史実を篩にかけた。当然のことながら眼鏡にかなう看護婦は限られており、その時発見されたのは2人だけである。1910年代の終わり頃に1人付け加わり、全部で「3人だけ」という理解がそれから四半世紀の間づく。創成物語の原型は、この時に完成したといつてよい。19世紀の末葉にごく少数の正看護婦のパイオニアワークによって新しい看護領域が切り拓かれた、というストーリーである。全員がプロテスタントの白人女性で、いずれも東部の企業や店舗で働いていたという共通点がある。加えて、誰ひとりとして自分が“industrial nurse”だとは夢想だにしていなかったということも、普段言及されることはないが、重要な共通点である。

本稿の目的は、草創期の訪問看護リーダーたちの書き物を厳密に読みなおし、産業看護の創成物語がどのようにして拵えられてきたのかを

³⁾ 19世紀末葉に公開された連邦労働省の報告書に掲載されている「労働にかかわる判決」欄、あるいは労働災害発生率の高かった鉄道業および鉱山業の業界誌を繙くなら、医師と看護婦を雇用していた企業をいくつも拾うことができる。U.S., House, *Bulletin of the Department of Labor*, ed. Carroll D. Wright and Oren W. Weaver (Washington, D.C.: GPO, 1895-1899). 鉄道業の業界誌は、*The Railroad Gazette*, およびその後継誌 *The Railway Age*. 鉱山業の業界誌は、*Mining Herald and Colliery Engineer*, およびその後継誌 *Colliery Engineer*.

⁴⁾ 19世紀末のアメリカでは鉄道外科（railway surgery）が独立の医学部門として確立しており、著名なテキストも出版されていた。Clinton B. Herrick, *Railway Surgery: A Handbook on the Management of Injuries* (New York: W. Wood & Co., 1899). 20世紀初頭ミシガン州の銅山鉱業における疾病基金と医療サービスについては、U.S. Bureau of Labor Statistics, “Michigan Copper District Strike,” *Bulletin of the United States Bureau of Labor Statistics*, no. 139, February 7, 1914 (Washington, D.C.: GPO, 1914), 35, 124-25. 後の研究は、William B. Gates, Jr., *Michigan Copper and Boston Dollars: An Economic History of the Michigan Copper Mining Industry* (Cambridge: Harvard University Press, 1951), 104; Stuart D. Brandes, *American Welfare Capitalism, 1880-1940* (Chicago: University of Chicago Press, 1970), 92-93.

再現することによって、彼女たちの思考の枠組を理解し、現代にまで影響を及ぼしている産業看護の思想前提を明らかにすることである。彼女たちの歴史認識の営みを振り返るわけであるが、振り返り方に本稿の方法論的な特徴がある。訪問看護リーダーたちの歩んできた道をそのまま辿り、彼女たちにもう一度最初から創成物語を作ってもらうのである。こうすることで、当人が十分に自覚していなかった認識の枠組を明らかにし、よく知られた物語の中にあるよく知らないものを露顕させる、という算段である。⁵⁾

研究の背景 本稿は年来のテーマであるアメリカ人事管理史研究の一環であり、この視点から本研究の位置づけと新たに得られた知見をまとめておく。

1910年代に興隆した人事管理運動の特徴をまず押さえておこう。1870年代以降アメリカ製造業は劇的な成長をとげ、とくに19世紀末葉における企業規模の飛躍的な拡大と南・東欧系移民の大量流入を背景に、労働問題が強く意識されはじめると、大企業や開明的な中堅企業は、それに対処すべく種々の専門家を登用しはじめた。福利管理者、インダストリアル・エンジニア、衛生技師、セイフティ・マン、教育訓練管理者、産業医、女子従業員の世界をするマτροンなどである。これら労働分野の専門管理者たちは、お互いのことをよく知らず、それぞれ一個の専門家たらんとし、自前の専門家協会を持つようになる。それが1916年、雇用管理運動 (employment management movement) の興隆によって、このような狭い専門性の枠が崩された。労働移動 (labor turnover) という最大の労働問題を解決するには、企業内の人間関係にかかわるすべての職能を雇用部に集めて人事管理 (personnel management) という新し

い専門職を作るべきであるとの教説が人気を博したことで、労働分野の専門家たちは自分の仕事領域が人事管理という包括的な管理職能の一構成要素に過ぎないことに気づかされたのである。かくして魅力的な労働問題解決策を雇主に売り込むことによって人事管理者という高い地位をめざす立身出世競争が戦われることになった。このような動きの総体が人事管理運動である。

産業看護婦たちはこの運動とどのように関わったのであろうか。第一に、彼女たちは人事管理者という地位に野心をもっていなかった。それというのも看護の仕事に誇りと思い入れがあり、英国の先達が指し示した「予言」に固く誓いを立てていたからである。すなわち、「産業看護婦は、医療専門家の助っ人として、公衆衛生看護婦として、ソーシャル・ワーカーとして、かつてフローレンス・ナイチンゲールの予言した時代が到来するよう全力を尽くすべきである。その時には、すべての看護婦が、病気の看護者 (sick nurses) ではなく、健康の守護者 (health nurses) となることであろう」と。⁶⁾ 看護婦のみながみなこのような矜持を持ちあわせていたわけではないが、そもそも志の低い者は人事管理者の地位に関心を持つだけの力量を欠いていた。

第二に、人事管理運動の中でしばしば語られた改革テーマのひとつに慈恵的な福利活動の見直しがあり、1910年代に提示された新しい産業看護婦像はそれを体現していた。雇用問題に関する当代随一の権威と謳われたエルマー・フィッシュ (E. H. Fish) は述べている。「われわれは、この自由の土地で、封建制が過ぎ去り労働者が従僕ではないということを、この頃ようや

⁵⁾ J. カラー『ディコンストラクション I』富山太佳夫、折島正司訳 (岩波書店、2009)、xviii。

⁶⁾ Florence Swift Wright, *Industrial Nursing: For Industrial, Public Health, and Pupil Nurses, and for Employers of Labor* (New York: Macmillan Co., 1919), 10.

く悟りつつある」と。⁷⁾ このような社会変化を背景に、訪問看護リーダーたちは「労使間の通訳者」という新しい産業看護婦像を提示していくことになるが、看護婦たちがこの理想通りに行動できたわけではなかった。産業看護婦たちの発言や前稿で検討した移民労働者のアメリカ化にかんする産業看護リーダーの見解を見る限り、看護婦たちは総じて雇主寄りの視点を有していたと考えられる。⁸⁾

第三に、産業労働者の福利活動にたずさわるようになった訪問看護婦協会は、1910年代に、慈善に距離をとりビジネスライクな視点を身につけるようになった。福利活動の性格については研究史がある。ジャコービィは、特別協議委員会（SCC）に加盟する優良企業によって主導された長期勤続者優遇型の金銭的福利（疾病保険、企業年金、有給休暇、従業員持株制など）が温情主義的な性格を薄める方向に機能したと述べている。⁹⁾ この見解は金銭的福利の慈善性を批判してきた労働史研究への反論の意味合いがあった。¹⁰⁾ だが真に問うべきは労働者の心のあ

と福利活動の担い手の意識のありようである。まず前者についていえば、金銭的福利にも温情的要素はつきまっていたが、リザベス・コーエンが考証しているとおり、1920年代の時代環境の中で労働者は大企業の私的福祉を受けられるようになった。¹¹⁾ 本稿がとりあげたのは後者である。1910年代に進展した労働者災害補償法と労災保険法への対応から、産業看護婦の役割認識に変化（マトロンから労使間の通訳者へ）が起きた。また、訪問看護婦協会は、保険会社との共同事業を通じて、長年慣れ親しんできた慈善に距離をとるようになり、看護サービスにマネジメントとコスト計算の視点を採り入れる必要性を自覚することになる。

論文構成 本稿の構成を示しておこう。創成物語の形成に寄与した歴史記述のほぼすべては看護婦の手になるが、彼女たちはどのような史料を検討したのかをいっさい明らかにしていない。19世紀のパイオニアたちのうち、ダンカンとブルックリンの百貨店の例は同時代の訪問看護リーダーたちの間で早くから知られていた〔第2節〕。それ以外はひとりまたひとりと段階的に発見されてきたものである。1910年代末にエイダ・スチュワート、1945年にその妹ハリエット、1970年代にベティ・モウルダーが発見された。このうちハリエットは長らく忘れられていた人であり、1945年の発見は記憶の回復であった。したがって、より古い起源が新たに発見されたのは1910年代と70年代であるが、この二つの時期はちょうど理想とされる産業看護婦像が大きく塗り替えられた時代である〔第3節〕。訪問看護リーダーたちの歴史認識の営みを結果から眺めると、あたかも新しい産業看護婦像を提示す必要が生まれた時に、それにふさわしい歴史的起源が、その都度、うまい具合に発見され

⁷⁾ E. H. Fish, "Relations between the Employment Department and Foremen," *Industrial Management* 52, no. 4 (January 1917): 557. 「当代随一」の台詞は、"[Editorial] Labor Turnover Costs \$1,250,000,000 Yearly," *NACS Bulletin* 4, no. 8 (August 1917): 2.

⁸⁾ D. A., "The Nurse in Industry," *American Journal of Nursing* 23, no. 11 (August 1923): 970-71; 上野継義「産業看護婦による移民のアメリカ化——安全運動と訪問看護運動との協働——」『医療化するアメリカ——身体管理の20世紀』平体由美、小野直子編（彩流社、2017）、91-146.

⁹⁾ Sanford M. Jacoby, *Employing Bureaucracy: Managers, Unions, and the Transformation of Work in American Industry, 1900-1945* (New York: Columbia University Press, 1985), 181-82; S. M. ジャコービィ『雇用官僚制——アメリカの内部労働市場と“良い仕事”の成立史——』荒又重雄、木下順、平尾武久、森泉訳（北海道大学図書刊行会、1989）、220-21. 金銭的福利について、ジャコービィは、SCCの開明的な大企業が開発した「新型」の福利活動だと位置づけている。現実には、20世紀初頭から幾つかの中堅企業や先進的な大手企業（SCC加盟企業を含む）で始まっていたものが、1910年代に制定された労働法制（政府の介入）ならびに移民労働者コミュニティに浸透していた民族別の互助会への対抗策として位置づけ直されたものである。

¹⁰⁾ John A. Garraty, "The United States Steel Corporation Versus Labor: The Early Years," *Labor History* 1, no. 1 (Winter 1960): 3-38.

¹¹⁾ Lizabeth Cohen, *Making a New Deal: Industrial Workers in Chicago, 1919-1939* (New York: Cambridge University Press, 1990).

てきたかのように見えるのである [第4節]。新しい起源がこのように都合良く見つかることに一抹の疑念がよぎる。この点を最後に考察してみたい [第5節]。

まずは、より古い起源が段階的に発見されて今日の通説ができあがるまでの経緯を、訪問看護リーダーたちの歩みに寄り添うかたちで、辿ることにしよう。

2. 百貨店のマトロン

アナ・ダンカン 1897年2月にアナ・ダンカンがニューヨーク市の百貨店、ジョン・ワナメーカー (John Wanamaker) の従業員共済組合 (Employees' Benefit Association) のために働きはじめた。これがアメリカ最初の産業看護だと言われるようになるのは1916年のことである。そこに至るまでの経緯を振り返ってみよう。

ワナメーカー社の取り組みに最初に注目した文献は、管見の及ぶ限り、イザベラ・ウォーターズ (Ysabella Waters) の1906年の論説である。当時はまだ“industrial nursing”という言葉がなく、ウォーターズは、訪問看護の特殊領域 (special fields of work) としてワナメーカー百貨店とナショナル・キャッシュ・レジスター社 (National Cash Register Co.) における看護婦の働きを取りあげている。二段組みの本文で僅か半ページくらいの記述であった。¹²⁾ この論説の掲載誌 *Charities and the Commons* は、革新主義期の社会改良運動を先

導するメディアとして注目されており、のちに *The Survey* と誌名を変更する。この文章は、後の研究者の目には、産業看護の起源を指摘した論考に映るかも知れないが、ウォーターズにはそのような意図はまったくなく、訪問看護婦の働きを知ってもらうのが目的であった。産業看護の起源を辿る目的で執筆された文章の場合、看護婦の名字がフルネームで記されることが多く、必ず「アメリカ最初の産業看護婦」といった、功績を顕彰する常套句が添えられる。ウォーターズの論説には、そのような定型句はいっさい見あたらず、ダンカンの名前も記されていない。彼女は産業看護の起源なるものにはまったく関心がなかった。

19世紀末葉から20世紀初頭にかけて、いくつかの先進企業において労働者の処遇改善の動きがすすんでおり、ウォーターズは、この流れの中に訪問看護婦の働きを位置づけようとしていた。その頃、大手の雇主に對して進歩的な労務政策を採るようアドヴァイスする人や団体が現れた。YMCA ニューヨーク本部国際部に属するセクレタリーたち、アメリカ社会奉仕協会 (American Institute of Social Service) のウィリアム・トールマン (William H. Tolman)、全国市民連盟 (National Civic Federation) 福利部のガートルード・ビークス (Gertrude Beeks) のほか、O. M. ベッカー (O. M. Becker)、チャールズ・カーペンター (Charles U. Carpenter)、H.F.J. ポーター (Holbrook Fitz John Porter) ら最初期のインダストリアル・エンジニアや機械技術者たちである。そして訪問看護婦協会もこのような労務改革の流れに棹さしていた。ただし、これらの団体や個人は、1910年代の半ばまで、個々ばらばらに活動しており、お互いのことをよく知らなかった。一例を挙げるなら、当時もっともリベラルな労務改革思想の持主であったベッカーは、訪問看護婦を雇用しているインタナシヨナ

¹²⁾ Ysabella Waters, “The Rise, Progress and Extent of Visiting Nursing in the United States,” *Charities and the Commons* 16, no. 7 (April 7, 1906): 18-19. この論説では“Ysabella”と署名している (たんなる誤植かも知れない) が、後の作品では“s”を重ねて“Yssabella”と綴っている。なお、ワナメーカー社が呼び出して対応するオンコール医師と常勤の看護婦を雇用しているとの指摘は、ひとあし先に次の文献でなされているが、仕事内容に立ちいって記述しているのはウォーターズが最初である。Margaret A. Cleaves, “Education in Sexual Hygiene for Young Working Women,” *Charities and the Commons* 15, no. 21 (February 24, 1906): 723.

ル・ハーヴェスター社（International Harvester Co.）で働いていたので、看護婦の存在には気づいていたが、それ以上の関心はなかった。彼は『エンジニアリング・マガジン』に掲載した論説の中で、「シカゴの立派な企業がひとりの訪問看護婦を雇用している」とたった一言述べているだけで、なんとも素っ気ない。¹³⁾このような状況下にあって、看護婦がビジネスの世界で活躍していることを伝えたいとの熱意が、ウォーターズの論説の行間から伝わってくる。

顕彰の定型句 訪問看護リーダーたちが産業看護の歴史に関心を持ち始めるのは1910年代中頃のことである。アナ・ダンカン（Annie Duncan）の名前が明記されるようになるのもこの時からである。彼女の働きは東部の訪問看護サークルではよく知られた「オンリー・イエスタデイ」の出来事だったようだ。¹⁴⁾とくに産業看護運動の指導者フローレンス・ライト（Florence S. Wright）の場合、自身ワナメーカーの従業員共済組合の仕事に就いた経験があり、ダンカンは自分の大先輩なのであった。彼女は、1916年10月、全国安全協議会（National Safety Council; NSC）主催全国安全大会の報告において、ダンカンこそ「個人情報が見られる」アメリカ最初の産業看護婦であるとの顕彰の台詞を添えて言及している。¹⁵⁾このような功績を振り返る言葉づかい

があらわれたのはこの時が最初であり、自己のルーツへの歴史的関心が生まれたことを物語っている。

シカゴ訪問看護婦協会（Visiting Nurse Association of Chicago）の婦長エドナ・フォリー（Edna Louise Foley）も、ライトより少し前に、顕彰の定型句を添えて同じ史実に言及している。だが、その論調は百貨店の仕事とは異なる種類の役割が新たに求められるようになった時代の変化に注意を促すものであった。ここに、当時の訪問看護リーダーたちが産業看護の歴史を再検討する必要に迫られた深い理由を読みとることができる。¹⁶⁾この点は第4節で詳述する。

1916年12月に公刊された書物『公衆衛生看護』には、二人目の産業看護婦が記されていた。「最初の産業看護がいつどこではじまったのかを自信をもって語るのは難しいが、その栄誉はジョン・ワナメーカーの会社に与えられるとみて間違いあるまい。同社が1897年にニューヨークの百貨店でひとりの看護婦を雇用している。いまひとつの店はブルックリンのフレデリック・ローザーズ（Frederick Loeser's）であり、同社の産業看護活動も前の世紀にさかのぼる（1899年）」とある。¹⁷⁾著者は、訪問看護婦たちの全国組織、全国公衆衛生看護協会（National Organization for Public Health Nursing; NOPHN）会長メリー・ガードナー（Mary Sewall Gardner）であり、権威あるお墨付きを与える言葉となった。

仕事内容と雇用形態 ダンカンがたずさわっていたのは、従業員共済組合の“secretary”

¹³⁾ O. M. Becker, “The Square Deal in Works Management, IV: Auxiliary Methods of Successful Labor Employers,” *Engineering Magazine* 31, no. 1 (April 1906): 50.

¹⁴⁾ ニューヨーク病院の同窓会記録や看護専門誌にダンカン（Annie Duncan）の名前が挙がっている。“Third Annual Convention of the Associated Alumnae of Trained Nurses of the United States: Minutes of the Proceedings,” *American Journal of Nursing* 1, no. 1 (October 1900): 70; “Official Reports of Societies,” *American Journal of Nursing* 4, no. 2 (November 1903): 125-46; “Official Reports,” *American Journal of Nursing* 6, no. 5 (February 1906): 333.

¹⁵⁾ Florence Swift Wright, “The Visiting Nurse in Industrial Welfare Work,” *NSC Proceedings* 5 (1916), 545-46. ライト報告は公衆衛生看護の全国組織の機関誌 *Public Health Nurse Quarterly* の1917年1月号に再掲載された。後の研究者はこちらの方を引用している。

¹⁶⁾ Edna L. Foley, “The Visiting Nurse in Industry,” *Modern Hospital* 7, no. 2 (August 1916): 125.

¹⁷⁾ Mary Sewall Gardner, *Public Health Nursing*, with an introduction by M. Adelaide Nutting (New York: Macmillan Co., 1916), 311. 同書の出版月は次の史料から確認できる。Edna L. Foley, “Department of Public Health Nursing,” *American Journal of Nursing* 17, no. 3 (December 1916): 233.

の仕事であった。ここにいうセクレタリーは運営主事とでも訳すべきであろうか、ウォーターズの説明によれば、仕事内容は広範囲に及ぶ。「勤めに出られない従業員をその家庭に訪い、必要なら二度三度訪問して看病し、従業員が毎週疾病手当を受けとっているか確認」すること。さらに、雇主から毎年千ドルの予備費 (emergency fund) が共済組合に払い込まれており、ダンカンもしも必要ならこれで疾病基金を補うことができたし、結核の初期段階の患者を山岳地帯に転地療養させたり、精神的に困難を来しそうな者に適宜休暇を与えることもできた。百貨店には小さな医務室があり、そこで従業員や常連客の応急手当てがなされた。この店は4千人から5千人の従業員を雇っており、そのおよそ三分の二が女性で、年若い少女がその大半を占めていた。看護婦は従業員の健康管理にたずさわっていたが、やがて従業員家庭への訪問看護が大きな位置を占めることが分かってきた。訪問時間はまちまちであり、短時間ですむこともあれば、徹夜で看病することもある。¹⁸⁾ 以上がウォーターズの調査結果であるが、共済組合の予備費の使途に自由度があり、看護婦に大きな職務権限が与えられていた点がとても印象深い。

産業看護婦にとって労働者家庭の訪問には特別の困難がともなった。訪問看護婦協会が貧困家庭にスタッフを派遣するのとはまったく性格を異にしている。その理由をフローレンス・ライトは次のように説明している。ダンカンは共済組合の積立金から給料を受け取っており、これが看護婦と従業員との関係を良好に保つのに寄与した。なぜなら「看護婦は共済組合メンバーの代表組織によって任命されるわけだから、まさしく労働者によって雇用されたことになる。このような計らいがあると、時には調査のため

だけに家庭訪問することも可能になる。なぜなら労働者たちは、そうした訪問活動が理にかなったもので、自分たち自身の積立金でおこなう保健活動にとって大切なことだと理解しているからである。もしもこのような計らいがないと、看護婦が調査のためだけに訪問することは、その真意が疑われるだけではすまない」と。¹⁹⁾ この文章から労使関係のはざままで仕事をする産業看護婦の難しい立場が浮かび上がってくる。

当時の訪問看護リーダーたちは、産業看護婦がスパイとして使われることの危険性について、繰り返し警鐘を鳴らしている。ワナメーカーの場合、共済組合のファンドの一部は会社が拠出しているゆえ、看護婦は「労働者によって雇用された」と完全に言い切れるかどうか疑問は残るが、会社の直接雇用というかたちをとっていなかった点は注目されてよい。これに対して、会社から給与が直接支払われている場合には、産業看護婦がスパイとして労働者家庭に派遣されているのではないか、そうした疑心暗鬼が労働者のところに宿るのは避けがたかった。もしもそうなれば、この道の識者が警告しているように、労働者の信頼の情は失われる。しまいには、「看護の本当の価値までが滅殺されて、看護婦の教育上の努力も台無しになってしまう。」²⁰⁾ これは産業看護の成否を分けるはなはだ重要な問題であった。

産業看護の広がり ワナメーカーの試みは百貨店業界で広く模倣されることになった。ニューヨークでは、1899年にブルックリンのフレデリック・ローザーズ、1904年にメーシーズ従業員互助会 (R. H. Macy's Mutual Aid Association) で看護婦が雇用された。この動きはカリフォルニア州にも広がった。1900年にサンフラ

¹⁸⁾ Wright, *Industrial Nursing*, 3.

²⁰⁾ Lee K. Frankel, *Health of the Worker: How to Safeguard It* (New York: Funk & Wagnalls Co., 1924), 70-71.

¹⁸⁾ Waters, "The Rise, Progress and Extent of Visiting Nursing," 18.

ンシスコのエムポリアム百貨店（The Emporium）、1902年にロサンゼルススのブロードウェイ・ストア（The Broadway Store）、1903年にサンフランシスコのヘイル・ブラザーズ（Hale Brothers）、1906年にロサンゼルススのバロックス（Bullock's）とつづく。さらに他の地域にも飛び火した。1904年に、ボストンのファイリーン共同組合（Filene Co-operative Association）とシカゴのカーソン・ピリー＆スコット（Carson, Pirie & Scott）で看護婦が雇用されている。²¹⁾

このように百貨店での働きが目立っていたが、ほぼ同時期に、産業企業でも正看護婦の雇用は進展していた。主だったところだけを挙げるが、1901年に、オハイオ州デイトンのナショナル・キャッシュ・レジスター社、マサチューセッツ州のプリマス・コーデジ社（Plymouth Cordage Co.）、銅山トラストを構成するモンタナ州のアナコンダ銅山鉱業会社（Anaconda Copper Mining Co.）で看護婦が雇用された。1902年には、コネティカット州のチェース・メタル製作所（Chace Metal Works）、1903年にはインタナショナル・ハーヴェスター社のシカゴの事業拠点マコーミック製作所（McCormick Works）とつづく。²²⁾

看護婦の仕事内容や役割は産業により企業によりまちまちであったが、年若い女子従業員に対する相談相手兼監督者、すなわちマトロン（matron）としてことのほか重宝されていた。もとよりこの役割は必ずしも看護婦ばかりが務

めていたわけではなく、ソーシャル・ワーカーが就くこともあった。しかし、百貨店業界では、看護婦こそマトロンに適任であると思われていた節がある。マトロンの仕事は1910年代の産業看護婦像の変化の中で次第に脇へ追いやられることになるのだが、そのことを理解するためにも、ここで少しく敷衍しておこう。

マトロンの仕事 英米の看護史に通じている人が「マトロン」と聞けば、ただちにナイチンゲール式看護教育において要の位置を占める理想的な人格者を想起するはずである。これとアメリカ百貨店のマトロンとはまったくの別ものであるが、しかし、思想的なつながりがなくはない。英国の病院附属看護学校のマトロンは看護総監督を意味する職業名称である。教育理想の体現者であり、見習い看護婦を教諭する教師、後進の精神的な導き手である。マトロンを核に組み立てられた見習い教育のシステムはアメリカの看護教育にも大きな影響を及ぼしており、ナイチンゲール方式を採用したアメリカの看護学校にはマトロンの職位が存在したし、病院では「婦長」の代名詞となった。

この教育制度の背後には、品性卑しき女性を道徳的な高みに引き上げようとの管理哲学が控えており、百貨店のマトロンも同じ理由で雇用された。下層階級出身の女子従業員に「正しい」生活態度、「華美に走らない健全な」衣服や身なり、「健康的な」趣味や「堅実な」読書習慣を教える必要があるとの社会通念が存在し、百貨店の当主もこのような考えを共有していた。たとえば、1910年代初頭にニューヨークのメーシー百貨店（R. H. Macy & Co.）で雇用されていた正看護婦は「ストア・マトロン」と呼ばれており、従業員の保健や衛生教育だけでなく、生活全般（general welfare）の面倒もみていた。連邦労働統計局の1913年の調査によれば、同社の看護婦は従業員図書室の読書案内係も務めており、百貨店に働く少女たちに立派な

²¹⁾ Gardner, *Public Health Nursing*, 301; Yssabella Waters, "Industrial Nursing," *Public Health Nurse* 11, no. 9 (September 1919): 728-29.

²²⁾ Waters, "Industrial Nursing," 729; "Address Delivered at the Monthly Luncheon of the "Safety First" Committee of the Illinois Manufacturers' Association, by the Superintendent of the Visiting Nurse Association of Chicago," January 28, 1914, in Visiting Nurse Association of Chicago, *Twenty-Fourth Annual Report, for Year Ending December 31, 1913*, 33; Becker, "The Square Deal in Works Management, IV," 50.

書物を手渡す道徳的な導き手として期待されていたと考えられる。²³⁾

百貨店におけるマトロンの仕事を看護婦たちはどのように受けとめていたのだろうか。ヘイル・ブラザーズに勤める正看護婦キャリー・ジョーンズ (Carrie Perry Jones) は、1904年9月、地元の見護雑誌に短文を寄せて、女子従業員との心の交流が実現するまでの自己成長の物語を綴っている。それによれば、最初の数ヶ月間、百貨店の仕事に打ち込めない自分を感じていたという。百貨店の従業員は「教養がなく、品性を欠き、自分の生活を高めようとの向上心がない」と、突き放して眺めていた。あそこが痛い、ここが痛い、という女の子の相談にのる退屈な仕事にやりきれない思いを抱いていた。救急病院 “emergency hospital” と称するちっぽけな保健室に、朝の9時から夕方6時まで詰めているのは「人生の無駄遣い」ではないのか。このような思いにかられていたある日、カーネーションの花束をもって病の床にある友人を見舞う女の子の姿、花束を受けとった少女の瞳に光るものを目の当たりにして、胸を打たれた。これを機に従業員一人ひとりと向き合ってきたわが身を顧みることになる。従業員の中には家族や親戚のいない少女もいて、愛情に飢えている。百貨店は家族のようなものであり、子どもに接する母親のように、一人ひとりを愛さなければならぬ。そして彼女はジェームス・ラッセル・ロウエルの詩「我が愛」の一節を引いて文章を結んでいる。²⁴⁾

この手の体験談を読むと、プロテスタント的な自己修養の物語が基調音を奏でており、看護婦たちの間で、自制心と献身的な自己犠牲を讃

美し、「母性愛」を大切にする姿勢が広く共有されていたとの印象を受ける。年配の看護婦や訪問看護リーダーたちは「マターナル」な感性こそ看護婦を看護婦たらしめる不可欠の要件だと考えていた。しかし、当然のことながら看護婦ひとりひとりの思いはさまざまであり、リーダーの目に適わぬ看護婦もいた。²⁵⁾ キャリー・ジョーンズの場合、「稀で特異な症例」にやる気を感じず野心的な人であり、百貨店の仕事には「新しく学ぶものなど何もない」と、早々と見切りをつけていたのである。純粋な専門家志向が窺えるこうした言葉遣いから推して、ジョーンズがこの論説でどの程度本心を語っていたのかについては疑念が残る。しかし、文章の結論は母性愛の讃美、すなわち看護の大先輩たちの思いに恭順の意を示すかたちで締めくくられており、またそうでなければ彼女の文章は看護の専門誌に掲載されなかったかも知れない。²⁶⁾ 訪問看護リーダーはマターナルな感性の大切さを説き、母性思想を梃子にして看護を「女性専門職」として位置づけようとしていた。このような心性の持主にとって、産業看護という新しい専門領域が女性の手で切り拓かれたということ、また、母性の働きを求める百貨店において看護婦が重用されていることは、注目に値する出来事だったのではあるまいか。

²³⁾ ある年配の看護婦の目から見れば、看護学校の卒業生のうち、自分の理想にかなう生徒の数は多くなかった。いわく、「正看護婦のおよそ5人に1人が卒業後にながしかなれる。残りの4人は看護婦にはふさわしくありません、もとよりそれなりに良い妻にはなれましょうが。」 William Fitch Cheney, “The Vocation of the Trained Nurse,” *Nurses’ Journal of the Pacific Coast* 1, no. 2 (March 1905): 117-22. 引用は117頁から。

²⁴⁾ ジョーンズの論説が掲載された *Nurses’ Journal of the Pacific Coast* は西海岸在住の看護婦が主たる読者であったが、その編集方針は「私たちの大切な全国誌」 *The American Journal of Nursing* に倣っていたと考えられる。そのことは東部やシカゴの大先輩に対する最大級の敬語 (“the most distinguished women in their profession”) や言葉づかいに自ずと顕れている。“Editorial,” *Nurses’ Journal of the Pacific Coast* 1, no. 4 (September 1905): 225-32; Sophia L. Rutley, President of the California State Nurses’ Association, “The President’s Annual Address,” *Nurses’ Journal of the Pacific Coast* 1, no. 4 (September 1905): 233-35.

²³⁾ Elizabeth Lewis Otey, *Employers’ Welfare Work*, Bulletin of the U. S. Bureau of Labor Statistics, no. 123 (May 15, 1913), 54-55.

²⁴⁾ Carrie Perry Jones, “The Emergency Hospital in a Large Department Store,” *Nurses’ Journal of the Pacific Coast* 1, no. 1 (December 1904): 48-50.

ところが、1910年代に入って新しい専門職業として“industrial nursing”が意識されるようになると、早くも新しい産業看護婦像が模索されはじめ、マトロンとしての役割に距離が置かれるようになる。そして、この時、産業看護の歴史を探求する作業が開始され、結果的に、訪問看護リーダーたちは、ワナメーカーよりも古い事例を見つけてくることになる。節を改めて見ていこう。

3. 新しい起源を求めて

本節では、19世紀に活動していた産業看護婦として、エイダ・スチュワート、ハリエット・スチュワート、ベティ・モウルダーが、ひとりまたひとりと順に発見されて、今日の通説が形成されていく姿を、訪問看護リーダーたちの歩みに即して再現する。

エイダ・スチュワート ニュー・イングランドの辺境の地で大理石製造を営むヴァーモント・マーブル社（Vermont Marble Co.）は、1895年以降、2、3名の看護婦と、時に数名の見習い看護婦を雇用して、自社の従業員とその家族に看護サービスを組織するようになる。同社で最初に雇用された看護婦がエイダ・スチュワートであり、彼女が前節で見たアナ・ダンカンに代わってアメリカ最古の産業看護婦だといわれるようになるのは、1910年代の終わり頃であった。

ヴァーモント・マーブル社の事例を最初に紹介したのは、ワナメーカー社のケースと同様、イザベラ・ウォーターズである。1909年に上梓した『合衆国における訪問看護』の中で、2名の看護婦と時に1名の見習い看護婦がこの会社で雇用されていたことを指摘している。²⁷⁾ 同書は、

²⁷⁾ Yssabella Waters, *Visiting Nursing in the United States: Containing a Directory of the Organizations Employing Trained Visiting Nurses, with Chapters on the Principles, Organization and Methods of Administration of Such Work* (New York: Charities Publication Committee, 1909), 300-301.

訪問看護婦を雇用している団体を網羅的にリストアップしたダイレクトリーゆえ、ヴァーモント・マーブル社の事例は膨大なデータの海に埋もれており、そもそもこの史実に特別関心をもつような人は当時いなかった。ウォーターズにしてからが、産業看護の歴史的起源を探ろうとの考えは微塵もなく、これがワナメーカー百貨店よりも古い事例であることなど知るよしもなかった。当時の彼女は、訪問看護運動の急成長という事実にくちを奪われており、訪問看護婦協会の活動開始年や看護婦が雇用された年次を調べたのも、運動の成長速度を測るための一指標としてであった。

同書の初版が公刊された1909年当時、ビジネスの世界で働いている看護婦を一括りにする視点そのものがなかった。このダイレクトリーには、後から見れば、産業看護の事例がいくつも収録されているのだが、“industrial nurse”や“factory nurse”といった用語がなかったために、ウォーターズはそれぞれの実態に即して説明を工夫している。たとえば、「社会福祉の仕事」とか「ソーシャル・サービス看護婦」など、苦心の言葉づかいが散見され、単に「訪問看護婦」と記している箇所もある。²⁸⁾

ヴァーモント・マーブル社にとって看護婦の雇用は手厚い福利プログラムの要の位置を占めていたが、社会一般に看護婦の働きが広く認識されていたわけではなかった。たとえば、労働者の処遇改善のために精力的に活動していたウィリアム・トールマンは、同社の福利活動に目置いていたものの、看護婦の働きにはまったく関心を示していない。彼はウォーターズの書が公刊されたのと同じ年に『社会工学』という浩瀚な書物を出版して先進企業の福利活動を広く紹介しており、その中で同社にも論及しているので、抜き書きしてみよう。この会社は1880年

²⁸⁾ Waters, *Visiting Nursing in the United States*, 210-11, 224-25, 243-44, 246-48.

に創業した大理石製造の有力企業であり、創業者フレッチャー・プロクター (Fletcher D. Proctor) の名にちなむヴァーモント州プロクターに企業城下町を築いた。大理石の採掘拠点はヴァーモント州ラトランド郡の広い地域にそれぞれ15マイルほど離れて散在しており、鉄道を使わなければ隣接する事業拠点にも商店にも行くことができない。このような立地上の不便さゆえに、従業員向けの日用品を廉価で販売する「第一級の商店」を会社が用意した。商店の経営は会社が仕切っていたが、従業員代表5名を任命して諮問委員会を組織し、経営方法について改善提案を出させている。また、およそ4万ドルを投じてYMCAビルディングを建設し、移民労働者向けの英語教室などを開設した。²⁹⁾ 看護婦に関する記述がないので補っておくと、1896年8月6日にプロクターに社立病院が建設され、エイダ・スチュワートが最初のマトロン (婦長) になった。³⁰⁾ ヴァーモント州の辺境の地にあっては、公衆衛生行政の手が届かず、私企業に雇用された看護婦がその役割を担っていた。

発見と忘却 ヴァーモント・マーブル社の事例を“industrial nursing”の歴史的起点として位置づけ、同社で雇用された看護婦がエイダ・スチュワートであることを突きとめたのは、またもやフローレンス・ライトであった。1916年10月の第5回全国安全大会において新しく求められている産業看護婦像を提示しており、そのあとすぐに産業看護の歴史を振り返る作業を開始したと考えられる。その直接の契機となったのは、翌17年2月開催予定のNSC製紙業部会における報告を依頼されたことである。おそら

くこの時、製紙業界のセイフティ・マンが興味をもってくれそうな、百貨店のマトロンとは異なる、別のケースを捜していたのではないだろうか。そして幸いにも、「20年くらい前、ヴァーモント州の大理石製造会社がひとりの看護婦を雇用し、労働者家庭の訪問、看護、教育に専従させていた」という事実を発見するのである。³¹⁾ その後も彼女は調査を継続し、1919年に出版したアメリカ最初の産業看護学テキスト『産業看護』の中で会社名と看護婦の名前を特定した。「教育を受けた看護婦がおそらく初めて産業の仕事にたずさわった」のは、ヴァーモント・マーブル社がエイダ・スチュワートを雇った時である、と顕彰の台詞を添えて言及するに至る。³²⁾

ライトの発見は、文献史的に見れば、ウォーターズのダイレクトリーに記載されていたことがらの再発見であるが、同時に、忘却でもあった。エイダ・スチュワートの名前を突きとめたまでは良かったが、ヴァーモント・マーブル社で雇い入れた看護婦が2名以上いたというウォーターズの調査結果を見落としてしまった。というよりは、ライトの筆致から推して、彼女はウォーターズの書にそのような記述があることを知らずに調査をすすめており、最初から1人だと思い込んでいたようだ。それにウォーターズも、1919年に産業看護の歴史について文章をまとめる時、10年前に公刊した自分の書物より、ライトの調査に信を置くようになっていたと推察さ

²⁹⁾ William Howe Tolman, *Social Engineering: A Record of Things Done by American Industrialists Employing Upwards of One and One-Half Million of People* (New York: McGraw Publishing Co., 1909), 90-92, 273-74.

³⁰⁾ Ada Stewart Markolf, “Industrial Nursing Begins in Vermont,” *Public Health Nurse* 37, no. 3 (March 1945): 128.

³¹⁾ Florence S. Wright, “The Nurse in the Small Industrial Plant,” *Public Health Nurse* 10, no. 2 (April 1918): 179-83. この論説は1918年に公表されたが、この論説の成立経緯は“Report of the Secretary,” *NSC Proceedings* 6 (1917), 415-16, に記されている。1916年の全国安全大会における製紙業部会(Pulp and Paper Section)の閉会時に、次回の年次大会を待つことなく、1917年2月6～8日に開催予定のアメリカ・ペーパー&パルプ協会の年次大会に合わせて部会の会合をもつことが決まった。参加者がとても少なかったため、ペーパーのいくつかは大幅に短縮されたという。

³²⁾ Wright, *Industrial Nursing*, 2.

れる。³³⁾ ともかくエイダ・スチュワート以外の看護婦の存在は忘却の淵に沈んでしまう。

同時代の著者たちも産業看護運動の第一人者ライトの調査結果に右へ倣えした。たとえば、この分野で広く引用されている古典的作品『公衆衛生看護の発展』は1922年に刊行の運びとなるが、著者アニー・ブレイナード（Annie M. Brainard）は産業看護のはじまりについて次のように総括している。

今日知られている限り、1900年より前にわが国の産業で雇用されていた看護婦は3人だけである。最初は、1895年、ヴァモント・マーブル社において病気の従業員の訪問看護に従事した。二人目は、1897年、ニューヨーク市の大規模百貨店ジョン・ワナメーカーの従業員共済組合にかかわった。三人目は、1899年、フレデリック・ローザーがニューヨーク市ブルックリンの百貨店で雇用した。³⁴⁾

こうして産業看護の創成物語の原型が完成し、およそ四半世紀にわたり定説として受け継がれていく。女性の孤軍奮闘というヒロイックなストーリーがでできあがり、19世紀に活動していたのは「3人だけ」というこの台詞は独り歩きしはじめた。ブレイナードは、自身看護婦ではないが、NOPHNの機関誌の編者として活躍していたことから、この書物はあたかも全国協会による権威ある公式見解とみなされ、「歴史的データ」を集めた史料集のごとく受けとめられるようになる。のちの研究者が原史料にさかのぼる手間を省き、ブレイナードの書物からの孫引きで済ませてきたのは、まさしくその証左と言え

よう。³⁵⁾ なお、ブレイナードは重要なことを書きもらしていた。正規の看護教育を受けた看護婦だけを拾い上げるなら「3人だけ」、という条件をつけなかったことである。彼女にとっては当たり前の前提なので書き忘れたのかも知れないが、過去を文献でしか辿ることのできない後の世代が同書を読む時には、3人に絞り込んだ理由が不分明となるのは避けがたかった。

ハリエット・スチュワート この創成物語に居心地の悪さを感じていたのは、おそらくエイダ・スチュワート本人ではなかっただろうか。はたして彼女は臨終のまぎわに回想録を公表して、忘却された記憶を呼び戻すことになる。1945年4月25日、ニュージャージー州公衆衛生看護協会は、産業看護の開始50周年を祝った。祝典では、エイダ・スチュワートが、ひと月前にNOPHNの機関誌に載せた回想録「ヴァモント州における産業看護のはじまり」を読み上げる予定であったが、病の床にあってその願いかなわず、翌26日に他界してしまう。事実上の遺書となったこの回想録には、看護婦がユニフォームを着て自転車に乗る姿が好奇の目で見られた様子など、当時の情景が活き活きと描かれている。そして、控えめに次の史実を書き添えている。ヴァモント・マーブル社はエイダの働きを評価し、1895年の終わり頃、ウェスト・ラトランドとセンター・ラトランドの地域看護のためにエイダの妹ハリエットを追加雇用した。二人

³³⁾ ウォーターズは、1919年に、アメリカ最初の産業看護の事例としてヴァモント・マーブル社を紹介するが、同社で雇われた看護婦の人数にはまったく関心を示していない。Waters, “Industrial Nursing,” 728-29.

³⁴⁾ Annie M. Brainard, *The Evolution of Public Health Nursing* (Philadelphia: W. B. Saunders Co., 1922), 292.

³⁵⁾ たとえば次の論説は、ブレイナードの書から「歴史的データ」を引用したと述べている。J. G. Townsend, “Public Health Nursing,” *Public Health Reports* 40, no. 45 (November 6, 1925): 2471-78. さらに例を挙げると、キャサリン・ホームズの書は、産業看護の歴史を振り返る章において、ブレイナードの文章をそっくりそのまま引用している。Katherine M. Holmes, *History of Industrial Nursing up to Date* (Detroit: the Author, 1931), 3-4. 情報源を精査してまとめていると高い評価を得た学生論文も、ライトの『産業看護』を引用して「3人だけ」と言及している。だが、ライトの書には「3人だけ」という文言はなく、ブレイナードの書から引用したに違いない。Edythe Bogie, “The History of Nursing in Vermont,” *American Journal of Nursing* 42, no. 4 (April 1942): 421-24.

は会社の従業員だけでなく、地域住民の求めにも応じた。また、プロクター病院の助手にキャサリン・フィールド (Katharine Field) が来てくれ、地域看護にも出かけた、と。³⁶⁾

この回想録によって「3人だけ」という長年の定説は見直されることになったが、公衆衛生看護学テキストの修正には時間がかかっている。ハリエットの名前を入れるかどうかは著者の気分次第といった趣があり、近年のテキストでもハリエットを省いている例を見かける。³⁷⁾ また、理由は分からないが、キャサリン・フィールドの名を記した論文もテキストも見つけない。³⁸⁾

記憶の回復と歴史の創造 50周年の記念行事をよく観察すると、過去の記憶の回復と同時に、歴史の新しい創作がなされていたことに気づく。全国組織NOPHNの機関誌は、産業看護50周年記念号を出し、元NOPHN産業看護コンサルタント、ベセル・マグラス (Bethel McGrath) の筆になる「合衆国における産業看護の50年」を巻頭論文として掲載した。半世紀にわたる産業看護の成長を多面的かつ実証的に考察したもので、アメリカ公衆衛生協会 (American Public Health Association) の機関誌は、見事な回顧 (an admirable review) であると絶賛した。³⁹⁾ しかしながら、産業看護の歴史理解にとっては問題含みの叙述があり、優れた論考だけにマイナスの影響も無視できない。そのひとつは産業看護のニュー・

イングランド発祥説を明文化したことであり、いまひとつは“industrial nursing”の創成物語の構築プロセスと作者を隠蔽してしまったことである。

産業看護のニュー・イングランド発祥説というのは、おそらく訪問看護リーダーたちの間では半ば常識となっていた考えだったのであろうが、マグラスの論説においてははっきりと文字に刻まれた。「合衆国における産業保健活動の“最初の諸例”が北部大西洋岸に集まっているのは自然なことである。最初に工業化したのがこの地域なのであるから。」このように述べた後、産業看護婦の全国組織の設立運動を、ボストン産業看護婦クラブ (Boston Industrial Nurses' Club) から説き起こして、1942年4月19日のアメリカ産業看護師協会 (American Association of Industrial Nurses; AAIN) の設立に至る流れとして説明した。⁴⁰⁾ マグラスは、詳細に立ち入ることはできないと断りつつも、ニュー・イングランドのもう一本別の系譜、さらに公衆衛生の諸団体の動きも書き加えている。目配りのきいた説明であったが、ニュー・イングランド発祥説を信じている人がこの論説を読めば、そうした多様な道筋は目に入らないであろう。実際、産業看護50周年記念晩餐会の席でマグラス論文からボストンの系譜だけを抜き出した講話がなされており、10年以上も経って、この講話がAAINの機関誌に掲載されたために、後世の人の目には、ニュー・イングランド発祥説ばかりが視野に入ってくる結果になった。⁴¹⁾

³⁶⁾ Ada Stewart, “Industrial Nursing Begins in Vermont,” 125-29.

³⁷⁾ Mary A. Nies and Melanie McEwen, *Community/Public Health Nursing: Promoting the Health of Populations*, 6th ed. (Philadelphia: Saunders, 2014), 599.

³⁸⁾ 都市史の研究論文には、キャサリン・フィールドの名前のほか、2名の看護学生の名前が記されている。Michael Louis Austin, “Carving Out a Sense of Place: The Making of the Marble Valley and the Marble City of Vermont” (Ph.D. dissertation: University of New Hampshire, 2002), 115.

³⁹⁾ Editorial entitled “The Nurse in Industry,” *American Journal of Public Health* 35, no. 5 (May 1945): 510-11.

⁴⁰⁾ Bethel McGrath, “Fifty Years of Industrial Nursing in the United States,” *Public Health Nurse* 37, no. 3 (March 1945): 119-24.

⁴¹⁾ Margaret W. Lucal, “Industrial Nursing: A History,” *AAIN Journal* 6, no. 2 (February 1958): 14-16. この講話にはマグラス論文とまったく同じ文章が散見されることから、同論文からニュー・イングランドの系譜だけを取り出して晩餐会講話の原稿にしたと考えられる。また、スチュワートの回想録に学んだのであろう、19世紀の看護婦の誰ひとりとして自分が“industrial nurse”だとは思っていなかったという重要な事実を指摘している。

マグラース論文も晩餐会講話も、結果から歴史を再構成している点では同根であった。全国組織の設立（結果）に結びつく動きをさかのぼるならば、産業看護の源泉にたどりつくという暗黙の信仰が背後にある。こうした信念で歴史を再構成すると、結果に結びつく史料だけが選択され、ほかの可能性が目に入らなくなる。神話的な歴史叙述が生まれる由縁である。そして厳密な実証こそ、批判的な視点から見れば、神話作りにとって不可欠の作業なのである。なぜなら、厳密な実証に支えられることによって、神話物語は、異なるものの見方を効果的に排除する力を獲得するからである。はたして、ニュー・イングランド職業衛生看護協会（New England Association of Occupational Health Nursing）は、2015年に創立100周年を迎えた折、マグラース論文や晩餐会講話に依拠したと思われる論説を記念誌に掲載し、ニュー・イングランド発祥説を補強する方向でさらに実証を積みあげている。⁴²⁾

ニュー・イングランド発祥説は異なる歴史理解の可能性を覆い隠す動きをしてきたと考えられる。先述のとおり、19世紀に多数の看護師がビジネスの世界で働いており、通説より古い事例もたくさんある。まずこの説を補強してくれそうな事例として、マサチューセッツ州ロウエルで1839年11月1日に開院したロウエル社立病院（Lowell Corporation Hospital）がある。⁴³⁾ これはアメリカ最初の企業病院（industrial hospital）であり、チャールズ・ディケ

ンズのアメリカ旅行記にも登場する。⁴⁴⁾ だが、これを模倣する動きはあらわれなかった。企業から企業へと模倣の連鎖をもたらした試みは、西部の鉄道会社で始まった鉄道病院（railway hospitals）である。これは疾病保険と医療サービスの結合したシステムであり、1868年に設立されたサザン・パシフィック鉄道（Southern Pacific Railway）の病院を嚆矢とし、西部の鉄道会社に広がった。人里離れた土地に事業拠点を有する鉱山業、製材業、魚缶詰業などでも病院建設の動きが見られた。これらの病院の多くでは困難を厭わぬカトリックの看護修道女の献身的な働きがあった。⁴⁵⁾ 西部の鉄道会社は先鞭をつけた理由は明らかである。比較的人口稠密な都市を結ぶ路線を保有していた東部の鉄道会社は、もしも労災事故が発生した場合、近隣の都市病院を頼ることができた。これに対して西部の鉄道会社は、人跡まばらな土地に路線を保有していたために、自前で病院を建設する必要があったのである。

こうした史実を念頭において従来の通説を見直すならば、ペンシルヴェニア州の炭鉱会社グループで雇用されたモウルダーの例も、ヴァモント州のステュワート姉妹の例も、「北部大西洋岸」諸州における産業看護の発祥を基礎づける事実なのではなくて、人里離れた土地に医療サービスを組織した西部の鉄道会社と同じ論理で看護婦を雇用したと見る方が理にかなっている。むしろ東部の企業は、同時代の各種調査

⁴⁴⁾ Charles Dickens, *American Notes* (New York: John W. Lovell Co., 1842), 647-48; ディケンズ『アメリカ紀行』伊藤弘之、下笠徳次、隈元貞広訳（岩波書店、2005）、上:152-53。

⁴⁵⁾ M. Riebenack, *Railway Provident Institutions in English-Speaking Countries* (Philadelphia: Pennsylvania Railroad Co., 1905), 215; U. S. Bureau of Labor, *Twenty-Third Annual Report of the Commissioner of Labor, 1908: Workmen's Insurance and Benefit Funds in the United States* (Washington, D.C.: GPO, 1909), 607; Edna Marie Leroux, "In Times of Socio-economic Crisis," in *Pioneer Healers: The History of Women Religious in American Health Care*, ed. Ursula Stepsis and Dolores Liptak (New York: Crossroad Publishing Co., 1989), 118-43.

⁴²⁾ Joyce Harsch, *100 Years: 1915-2015 Northeast Association of Occupational Health Nurses, Inc.* (New England Association of Occupational Health Nursing, 2017), esp. 7, 36, 100-106.

⁴³⁾ History of Franco Americans in Lowell Massachusetts, "Lowell Corporation Hospital/Saint Joseph's Hospital," accessed September 2, 2019, <https://francolowellma.wordpress.com/paroisse-saint-jean-baptiste/lowell-corporation-hospital-saint-josephs-hospital/>.

によれば、医療サービスの組織化の面で立ち後れていた。ニューヨーク州における1903年の調査によれば、福利プログラムをもつ企業100社強のうち、医師と看護婦をかかえて応急手当の体制を整えていたのはわずか2社に過ぎず、その他は民間の医師を呼ぶ体制をとっているところが数社あるだけという、心細い状況であった。⁴⁶⁾ 1917年10月の調査でも、事態は旧態依然、むしろこの間に労働者数が急増しているため事態は悪化していた。ニューヨーク州の工場数はおよそ78,000、そのうち福利制度を持っているのは100社に満たず、健康診断をしているのは10社もあるかどうかという状況であった。⁴⁷⁾

マグラス論文のいまひとつの問題は、“industrial nursing”の創成物語が結果から構築された歴史叙述である所以を覆い隠してしまったことにある。彼女は述べている。「Industrial nursingは医療専門家の創案になるのではないし、看護専門職の発明品でもなく、企業経営者によって創始されたのである。ヴァモン・マープル社の社長フレッチャー・D.プロクターがその人である。」⁴⁸⁾ 事実がまったく異なることは、説明不要であろう。プロクターにとっても、スチュワート姉妹にとっても、“industrial nurses”など露知らぬことがらであった。この言葉を発明して、物語を創作し、エイダ・スチュワートに「最初の産業看護婦」という顕彰の言葉を献上したのは、1910年代末葉の公衆衛生看護運動（訪問看護運動は1910年代以降このように呼ばれるようになる）のリーダーたちである。

マグラスはなぜこのような単純な誤りを犯したのだろうか。結論的に言えば、エイダの気持ちを察して、意図的にそのような説明を織り込んだのではあるまいか。エイダの回想録を一読してすぐに気づかされるのは、自分の経験よりも会社の方針や経営者プロクターの偉業を讃える文章が大きなスペースを占めていること、自分たちの仕事を「地域看護」「訪問看護」という言葉で一貫して説明し、“industrial nurses”という言葉に距離をとっていること、そして自分の経験を三人称の代名詞で記して、あたかも他者の物語であるかのごとく書くことである。たとえば、回想録の締めくくりの文章はこうである。

昔ながらの「試行錯誤」の繰り返しでした、「プロクター地域看護婦たち」の日々の仕事というのは……。彼女たち（they）は自分たちが“Industrial Nurses”だということを知りませんでしたし、ましてこれがそのほかの小さな出来事と合わさって、現代の公衆衛生看護婦が世界中でなさっている見事なお仕事に成長するとは夢にも思っていないでした。今日の公衆衛生看護婦のみなさんは、立派な教育の恩恵に与り、強力な専門家協会に支えられています。まさかご自分のなさっていることがこのような小さなはじまりに何かを負っているとは露思わないことでありましょう。⁴⁹⁾

⁴⁶⁾ Don D. Lescohier, “Working Conditions,” in *History of Labor in the United States, 1896-1932*, vol. 3 (New York: Macmillan Co., 1935), 319. レスコイヤーの指摘は次の史料に依拠している。New York State Department of Labor, “Employers’ Welfare Institutions,” in *Third Annual Report of the Commissioner of Labor for the Twelve Months Ended September 30, 1903* (Albany: Oliver A. Quayle, 1904), 223-329.

⁴⁷⁾ Louis I. Harris, “Relation of Industrial Hygiene to General Practice,” *New York Medical Journal* 107, no. 20 (May 18, 1918): 928-31.

⁴⁸⁾ McGrath, “Fifty Years of Industrial Nursing,” 119.

⁴⁹⁾ Ada Stewart, “Industrial Nursing Begins in Vermont,” 125-29. ブロック・クォーターションは129頁から。この論文は、100周年記念の年（1995年）に、地元の歴史協会の機関誌に再掲載されたが、大幅な書き替えがなされている。削除、追記、名詞の複数形を単数形に、人称代名詞の変更など、微にいり細にわたる加筆修正が施され、まったく別の文章になっている。ここに引用した箇所では、人称代名詞の“they”を“she”に書き替えて、エイダ個人の業績を顕彰する文章に作り替えられている。彼女の本意を踏みにじっているように思えてならない。ただし、文章に加筆した人たちの思想を浮き彫りにするための恰好の史料ではある。Mrs. Henry J. Markolf (formerly Ada Mayo Stewart), “The Beginning of Industrial Nursing in Vermont (1945),” *Rutland Historical Society Quarterly* 25, no. 4 (1995): 67-74.

文中の鍵括弧は原文クォーテーション・マーク、エイダ自身による強調である。この文章の少し前では、「公衆衛生看護」という言葉が当時はなかったとも記している。マグラスは、この先達の、まさに消え入らんとするような文章の行間を読まずにはいられなかったはずである。最初の“industrial nurse”として顕彰され、創成物語の主人公に祭り上げられ、今日の公衆衛生看護の隆盛はあなたが種を蒔いたものなのだと過大に評価されてしまったエイダの困惑を深く察したのではなかったか。それゆえ、もしも“industrial nursing”の発明を経営者プロクターの手柄とすれば、病の床にあるエイダのこころの重荷を少しでも軽くしてあげられる、このような深慮をめぐらせたように思えてならない。それに、みなが共感してくれる深慮が背後になかったとしたら、マグラスの単純な誤りを周りが見逃すはずはなく、むしろ誤りだということを重々承知の上で好意的に深読みしてくれる読者を想定した時、マグラスの論述を素直に受け取ることができるのである。

しかし問題は解決していないどころか、より深刻さを増している。事情を知っている同時代人がマグラス論文を読む分には問題は生じない、むしろ密かに拍手を送ることであろう。ところが、内情に通じていない後世の者が読んだ時、結果から歴史を再構成して創成物語を拵えてきた訪問看護リーダーたちの積極的かつ能動的な役割は見えてこない。神話の作り手が覆い隠されてしまっただけでなく、“industrial nursing”という言葉の使用年代も不分明となってしまう。⁵⁰⁾ マグラスのエイダへの細やか

な思いやりは、批判的な視点から言えば、神話を完成させる方向に機能したのである。

ベティ・モウルダー 産業看護の歴史を再訪しようとの熱意は、1960年代後半に、ふたたび蘇ってきた。職業安全衛生法（Occupational Safety and Health Act）の制定とその前後に進展した職業衛生分野での法制化の動き、ならびに医療技術の急速な発展⁵¹⁾を受けて、産業看護職を時代の新しい要請に応えられるよう見直そうとの気運が盛りあがった。そして、この動きに呼応するように歴史的関心も高まり、またもや新事実が発見されることになる。

1888年に、看護婦ベティ・モウルダーがペンシルヴェニア州の炭鉱会社グループに雇用され、炭鉱夫とその家族のケアにたずさわっていたとの記録が見つかったという。1960年代後半は、アスベスト曝露による石綿肺、綿業労働者の綿肺症、炭鉱労働者の黒肺塵症など、数々の職業病が相次いでクローズ・アップされた時代であり、新しい「起源」が、当時問題になっていた炭鉱業で見つかったことは、新しい産業看護師像を提示する上で好都合であったことだろう。

だが、ベティ・モウルダーに関する情報がどのような史料から得られたのかは不明である。モウルダーに言及している最初期の論説にあたってみたが、典拠史料が示されていない。⁵²⁾ 看護の実務家たちの書き物は、総じて、学術研究の引用書式や研究手続きに無関心である。この点に疑問を感じるが、ともかく、モウルダーが

Marcia Stanhope and Jeanette Lancaster, *Public Health Nursing: Population-Centered Health Care in Community*, 8th ed. (Elsevier, 2014), 936.

⁵¹⁾ Jane A. Lee, “The Occupational Health Nurses’ Responsibilities to the Employee,” *Occupational Health Nursing* 17, no. 4 (April 1969): 18-21.

⁵²⁾ モウルダーに関する最初期の紹介例は、Rose A. Marino, “AAIN Salute to Bicentennial 1776-1976,” *Occupational Health Nursing* 23, no. 9 (September 1975): 23; American Association of Industrial Nurses, *The Nurse in Industry: A History of the American Association of Industrial Nurses, Inc.* (New York: the Association, 1976), 1.

「アメリカ最初の産業看護婦」とされ、1980年代には教科書に載るようになった。⁵³⁾ そうこうするうちにモウルダーの雇用から一世紀が経ち、この節目の年 (1988年) に「産業看護100周年」を祝う記念論文が全国協会の機関誌に掲載された。それによればモウルダーは、フィラデルフィア・ブロックリー病院 (Philadelphia Blockley Hospital) の正看護婦であったことと炭鉱企業グループに雇用されたことが判明しているだけで、彼女の事績は「ほとんど分かっていない」とある。相変わらず典拠史料が示されていない。なお、この論説は全国組織の機関誌AAOHN Journal創刊50周年記念の年 (2002年) に再掲載された。⁵⁴⁾

モウルダーの雇用形態について異説を唱えている論者がいるので紹介しておく。モウルダーを雇用したのは、炭鉱会社グループではなくて、炭鉱労働者のグループだと述べている。⁵⁵⁾ だが、典拠として引用されている二次文献には炭鉱会社が雇用したとあり、この説には史料の裏付けがない。前節で述べたとおり、産業看護婦の雇用形態が仕事の質に影響を及ぼしていたゆえ、この点を慮った著者たちが文章に手心を加えたのではあるまいか。

創成物語の作られ方 これまでの考察から、産業看護の創成物語がどのようにして拵えられ

たのか、また物語が人びとのものの見方にどのような影響を及ぼしているのかをまとめておこう。

第一に、創成物語は一人の人間によって作られたものではなく、多くの人びとの協働作業の結果である。複数の訪問看護リーダーが、ほぼ同時期に、同じ定型句を使って過去の人物を顕彰する文章をものしており、つづく世代が引用と孫引きを繰り返すことによって共感の意を表し、節目の年の記念行事で事実を確定している。主として全国組織の機関誌と記念行事の祝いの席で「起源」が共有され、公式の歴史が構築されてきた。

第二に、正規の看護教育を受けた女性が産業看護に就くべきであるという現在の到達点 (結果) から過去をふりかえるかたちで「起源」を構築している。このような歴史記述は、現在の状況を歴史の必然として正当化する作用があり、当事者を鼓舞するという効用がある一方、結果に結びつかなかった出来事は視野に入らない憾みがある。この点について訪問看護リーダーはもとより、リーダーにつきしたがう人たちも自省の念を欠いている。

創成物語の成立過程を振り返るなら、新しい産業看護婦像が求められた二つの時期 (1910年代と1970年代) に歴史の見直しがすすみ、その都度、求められている理想にふさわしい、より古い起源が発見されてきたことが分かる。偶然にしては話ができすぎているとの感が拭えないが、ひとまずそれは措き、次節では、1910年代に対象を絞り、訪問看護リーダーたちをして「自分たちのルーツを見つめ」⁵⁶⁾ ようとの思いに駆り立てた主体的な要因と客観的な条件を明らかにする。その上で、新しく発見された起源が産業看護婦像の作りかえにどのような役割を果たしたのかについても検討してみたい。

⁵³⁾ 次の公衆衛生看護学テキストの場合、初版 (1977) ではベティ・モウルダーは取りあげられていなかったが、第二版 (1985) には登場する。新しい発見が教科書に載るようになったおおよその年代を推定する便となろう。Joanne E. Hall and Barbara R. Weaver, eds., *Distributive Nursing Practice: A Systems Approach to Community Health*, 2nd ed. (Philadelphia: Lippincott, 1985), 484.

⁵⁴⁾ Jane E. Parker-Conrad, "A Century of Practice: Occupational Health Nursing," *AAOHN Journal* 36, no. 4 (April 1988): 156-61; Reprint of this article, *AAOHN Journal* 50, no. 12 (December 2002): 537-41.

⁵⁵⁾ Jean Brim Cahall, "The History of Occupational Health Nursing," *Occupational Health Nursing* 29, no. 10 (October 1981): 12; Stanhope and Lancaster, *Public Health Nursing*, 8th ed., 936.

⁵⁶⁾ Parker-Conrad, "A Century of Practice," 156.

4. 産業看護婦像の変容

慈善の担い手から労使の通訳者へ 1910年代の進行とともに理想とされる産業看護婦像が大きく変化した。産業看護の仕事をもっとする上でマターナルな感性はとても大切なものと従来どおり考えられていたが、慈善臭漂うマトロンの役割を前面に押し出すのははばかれる事態が進展していた。彼女たちは、労使双方に対して中立的な立場から問題解決にあたる専門家を新時代の看護婦像として提示していくことになる。

新しい看護婦像を定義する発言をいくつか拾ってみよう。エドナ・フォリーは、産業医学の専門誌『モダン・ホスピタル』産業福利特集号（1916年8月号）に筆を執って、産業看護婦像の新旧比較をおこなっている。「長いこと産業看護婦の平均像といえば、中年のとても上品な女性で、看護婦のユニフォームを身にまとい、その職務は女子従業員のマトロンになることであり、いつもは自分の控室に詰めている、というものであった。しかし近年、産業訪問看護婦は雇主と従業員双方にとっての通訳者だと言われるようになった。つまり家庭と職場の連結管である」と。⁵⁷⁾

フローレンス・ライトも時代の変化を肌で敏感に感じとっていた。1916年10月の第5回全国安全大会において、大企業のセイフティ・マンを前に、産業看護婦の新しい役割を売り込んでいる。「現代的な産業が成長する前は、雇主は従業員ひとりひとりの要望に個人的に耳を傾けており、良好な人間関係（good feeling）も、労働者の福祉（industrial welfare）も、ひとえに雇主が身内思いかどうかにかかっていた。」だが、時代は変わった。大規模産業企業が成長し、ふたたび旧き時代に戻ることでない。雇主は従業員に対する「誠意や心遣い

を表現するための別の方法」を見つけねばならなくなった。その役割を「もっとも効率的に」代行するのが産業看護婦である、と。⁵⁸⁾

これらの発言はいずれも単なる事実認識ではなく、多かれ少なかれ、訪問看護リーダーたちの期待感が織り込まれていたと推察される。言葉の端端に窺われる新しい役割への意気込みや使命感からみて、フォーリーもライトも新時代の到来を強く念じていたのは疑い得ない。

もはや慈善の担い手ではない、労使間の通訳者が求められている。このような訪問看護リーダーたちの自覚は、どのようにして生まれてきたのであろうか。ひとことで言えば、1908年頃から労働者災害補償法と労災保険法の制定運動が始まり、10年代に現実に法制化がすすみ、この過程で看護婦に新しい役割が求められるようになったからである。もちろん現実には複雑であり、法環境の変化に新しいチャンスを見いだした人や団体がいくつもあり、それらがほぼ同時に行動を起こしており、その中で看護婦たちも影響を及ぼし、及ぼされるかたちで事態は進展した。⁵⁹⁾ ここでは、話を単純化する嫌いはあるが、訪問看護婦たちの働きに期待を寄せるようになった社会改良家たちの動きと、鋭敏なビジネス感覚で新事業を切り開いていく訪問看護リーダーたちの動きに焦点を絞り、新しい役割観が生まれてくる姿を再現してみよう。

社会改良家の期待 まず社会改良諸派の

⁵⁸⁾Wright, "The Visiting Nurse in Industrial Welfare Work," 546-47.

⁵⁹⁾草の根レベルでは、進んだ労務政策を採り入れていた企業に務める訪問看護婦たち自身のものの見方の変化があった。企業の福利活動に日々たずさわる中で、新しい能率観の存在に気づいている。だが、こうした動きがどの程度の広がりをもっていたのかについては、史料が限られており、確かなことは言えない。May B. Dickinson, "Factory Welfare Work," *American Journal of Nursing* 11, no. 11, *Proceedings of the Fourteenth Annual Convention of the Nurses' Associated Alumnae of the United States, Boston, Mass., May 31-June 3, 1911* (August 1911): 941-45.

⁵⁷⁾Foley, "The Visiting Nurse in Industry," 125.

産業看護への期待感の高まりを跡づける。当時は、社会改良を目指すさまざまな運動が同時並行的に進展しており、ここでは産業改善運動、公衆衛生運動、産業衛生運動、雇用管理運動の指導者たちが、産業看護運動をどのような期待感をもって眺めていたのかを順に見ていくことにしよう。

産業改善運動の指導者ウィリアム・トールマンは、労務改革の担い手を熱心に探し求めていたが、訪問看護婦への期待は当初それほど高いものではなかった。それが1910年以降、彼女たちに向ける眼差しが質的に変化する。

1909年まで、トールマンは百貨店におけるマトロンの仕事をことのほか重視していた。彼が社会福音派の牧師ジョサイア・ストロング (Josiah Strong) とともにアメリカ社会奉仕協会 (American Institute of Social Service) を立ち上げたのは1898年8月である。労働環境の改善にかかわる内外の情報を収集するとともに、企業の内側から労働者の処遇を刷新していく労務改革の担い手、ソーシャル・セクレタリー (social secretary) を雇用するよう雇主に説いて回った。⁶⁰⁾ その著『社会工学』を繙くと、彼は異なる性格の多様な職業人をソーシャル・セクレタリーとして取り上げているが、百貨店については次のような資質の担い手を求めていた。

百貨店のソーシャル・セクレタリーは大家族の寡母のようなものであり、彼女が与えることのできる限りなき母性愛 (all the mothering) への要求切なるものがあります。移民の大多数は読み書きがまったくといってよいほど出来ませんし、移民の子どもたちは数年間の学業を終えてすぐに仕事につき、百

貨店に来ることもあるでしょう。母親が手本を示してこれらの子どもたちに聡明な教育をほどこすことがもしもかなわないなら、子どもたちに必要なことのすべてを心得ているソーシャル・セクレタリーに預けられ、彼女が母親に代わって知的かつ有益なアドヴァイスをするのです。⁶¹⁾

トールマンはマトロンの働きを重視していたが、これを看護婦が担うべきだとは考えていなかった。『社会工学』を繙くと、メーシー百貨店における看護婦の雇用に言及はあるが、訪問看護リーダーたちが注目するワナメーカーについては貯蓄組合やハイキングのことしか語っていない。製造業における看護婦の雇用については、クリーヴランド・ハードウェア社について立ちいった検討がなされているので、この面を重視しはじめたことが窺われるが、しかし、ヴァモント・マーブル社の産業看護についてはひとつも触れていない。つまり、看護婦について一貫した評価基準を持ちあわせておらず、労務改革の担い手としてさほど重視してはいなかったのである。

だが、それからわずか数年の間に、トールマンの看護婦を見る目が一変し、社会改良ならびに労務改革の大切な担い手として訪問看護婦を位置づけるようになる。1910年頃から、自己の活動範囲を産業安全衛生の分野に絞り込み、安全衛生博物館の設立に向けて運動を組織していた⁶²⁾ こともあり、1912年に『労働者のための

⁶¹⁾ Tolman, *Social Engineering*, 51.

⁶²⁾ Tolman, "European Museums of Security," *Century Magazine* 72, no. 2 (June 1906): 307-14; Tolman, *Social Engineering*, 115-31; American Museum of Safety, *Safety* 5 (May 1917): 138; U.S. Bureau of Labor Statistics, *Personnel Research Agencies: A Guide to Organized Research in Employment Management, Industrial Relations Training, and Working Conditions*, BLS Bulletin, no. 299 (November 1921), 133, 149; NSC *Proceedings* 2 (1913), 5-6.

⁶⁰⁾ William H. Tolman, "The League of Social Service," *Arena* 21, no. 4 (April 1899): 473-76; idem, "The Social Secretary: A New Profession," *Outlook* 77 (July 9, 1904): 594-98.

衛生』と題する中等学校向け職業教育読本を共著で刊行した時には、ソーシャル・セクレタリーには言及せず、むしろ訪問看護婦の働きに紙幅を割いた。「工場内病院や救急室に詰めているカンパニー・ドクターや外科医、および正看護婦に加えて、労働者を大量雇用している産業企業では、能率増進のファクターとして、さらには志気の向上と労使の相互理解の貴重な助っ人として、訪問看護婦を重視するようになってきた」と。⁶³⁾

訪問看護運動に一貫して熱い視線を向けていた人物に公衆衛生運動の指導者チャールズ・ウィンズロー (C.-E. A. Winslow) がいるが、彼もまた看護婦の新しい役割に着目するようになる。1911年5月、看護婦合同同窓会第14回会議における「公衆衛生キャンペーンにおける訪問看護婦の役割」という報告では、訪問看護リーダーひとりひとりの業績を数え上げたうえで、産業分野に「多くの機会を手にかけている」と、新しい役割期待を述べている。彼が念頭においていたのは企業外部からの工場検査の役割である。この任務を遂行するにあたっては、物的環境、大気の状態、採光、衛生設備の有無、総合的な清潔状態を視野に入れて調査をすすめる、産業災害や職業病から労働者を守らなければならない。教育を受けた看護婦ならこうした役割を適切に担うことができる。それゆえ訪問看護婦は、衛生学や細菌学の基本原理、さらには経済や社会の問題にも通ずる必要がある。もはや「経験だけを頼りにベッドサイドに待る僕」であってはならない、「訪問看護婦は職務上サーチ・ワーカーになるべきであり、ウォルドさん

のおっしゃっておられる“ソーシャル・リポーター”になってほしい。」⁶⁴⁾ このように力のこもった情熱的なメッセージを呈し、訪問看護婦たちの奮起を促した。

1910年頃に産業衛生運動が興隆すると、大手企業において従業員福利の見直しがすすみ、産業衛生の担い手として看護婦に期待する企業が出てきた。シカゴ大学教授チャールズ・ヘンダーソン (Charles Richmond Henderson) は、その著『産業における市民』のなかで述べている。「多くの企業が自社の福利活動のうち健康運動を重視している。そのために看護や医療の訓練を受けた女性を求めている。実際、この部門は福利部門と呼ばれることはなく、しばしば保健部門と呼ばれている。数カ月前に、ウェスタン・エレクトリック社 (Western Electric Company) は福利部門の設立を決定し、福利看護婦 (a welfare nurse) にその仕事を任せた。」⁶⁵⁾ 少し補足しておく、同社は1920年代のウェルフェア・キャピタリズム (私的福祉資本主義) を先取りする従業員福祉の先進企業である。男女半々およそ1万5千人の従業員をかかえるシカゴのホーソン製作所 (Hawthorne Works) では、年金制度、障害給付、疾病給付、死亡補償制度など長期勤続者優遇型の福祉プログラムをととのえており、さらに冷蔵設備の完備した近代的調理場で運営するカフェテリアやレストランもあった。このような手厚い私的福祉プログラムの一環として医務室が用意されていた。男女3名ずつ別々に治療できるよう間取りが工夫されていたが、従業

⁶³⁾ William H. Tolman and Adelaide Wood Guthrie, *Hygiene for the Worker* (New York: American Book Co., 1912), 179-181. トールマンは同書出版の翌年に安全衛生の書物も出版しており、彼の社会的関心はこの分野に集中したと言ってよい。William H. Tolman and Leonard B. Kendall, *Safety: Methods for Preventing Occupational and Other Accidents and Disease* (New York: Harper & Brothers, 1913).

⁶⁴⁾ C.-E. A. Winslow, "The Role of the Visiting Nurse in the Campaign for Public Health," *American Journal of Nursing* 11, no. 11, *Proceedings of the Fourteenth Annual Convention of the Nurses' Associated Alumnae of the United States, Boston, Mass., May 31-June 3, 1911* (August 1911): 909-20. 産業分野での役割期待を述べている箇所は、916-18頁。

⁶⁵⁾ Charles Richmond Henderson, *Citizens in Industry* (New York: D. Appleton & Co., 1915), 276.

員規模を考えるとこぢんまりしている。それというのも重い症状はシカゴの都市病院など近隣の医療インフラに委ねることができたからで、医務室では応急手当だけがなされた。⁶⁶⁾ 労働者災害補償法の法的圧力で企業は労働者の健康問題に無関心ではいられない情勢となっており、身の回りの医療インフラを見渡して、なんとか対策を採ろうとしていた。とくに労災法の実際の運用面で、職業病を補償の対象とする判決が出るようになれば、この傾向に拍車がかかるはずであり、保健衛生教育の担い手としても看護婦に対する需要が高まることを関係者は期待していた。⁶⁷⁾

1916年に雇用管理運動が立ち上がると、産業看護婦の雇用に弾みがついた。この運動の理論的指導者ヘンリー・メトカーフ (Henry C. Metcalf) は、1916年5月、全国私立学校協会 (National Association of Corporation Schools) の大会報告の中で、外国人労働者の不平不満を通訳するうえできわだった働き (yeoman service) をしてくれるのが産業看護婦であると、僅かな指摘ながら、高い評価を与えた。⁶⁸⁾ 実際、雇用管理の先進企業において看護婦が雇用されているとの話がいくつも伝わってきた。⁶⁹⁾

⁶⁶⁾ "Western Electric Company, Chicago, Ill.," *Modern Hospital* 7, no. 2 (August 1916): 157-58. ホーソン製作所はシカゴの西郊シセロ (Cicero) に立地した。

⁶⁷⁾ Edna L. Foley, "Department of Visiting Nursing and Social Welfare," *American Journal of Nursing* 14, no. 7 (April 1914): 547-48; Wright, *Industrial Nursing*, 6-7; Leon P. Alford, "The Status of Industrial Relations," *ASME Transactions* 41 (1919): 171.

⁶⁸⁾ Henry C. Metcalf, "Report of Committee on Vocational Guidance: The Organic Development of Business," *NACS Proceedings* 4 (1916), 353.

⁶⁹⁾ Ella Phillips Crandall, "Industrial Welfare Nursing," *Public Health Nurse Quarterly* 8, no. 2 (April 1916): 32-47; J. E. Banks's remarks, in "Discussion," *NACS Proceedings* 4 (1916), 727; Robert C. Clothier, "The Employment Work of the Curtis Publishing Co.," *Annals* 65 (May 1916): 101; Richard A. Feiss, "Personal Relationship as a Basis of Scientific Management," *Annals* 65 (May 1916): 36.

“industrial nurse”の誕生 訪問看護婦に対する期待の高まりを示す史料を上に紹介してきたが、これらの文章は、訪問看護婦たちの主体的な動きが先にあって、それを後から追認し鼓舞するという性格を有していた。以下では、訪問看護リーダーたちの動きを追いつながり、“industrial nurse”という言葉の誕生をたどることにしよう。この言葉が新しいビジネス・チャンスを切り開くためのツールだったということが分かるであろう。

アメリカ訪問看護運動の創始者リリアン・ウォールド (Lillian D. Wald) は、訪問看護婦の新しい活躍舞台の存在に比較的早期に気づいていた。彼女は、1911年11月11日、政治学会大会の討議において、産業企業で医師と看護婦が求められていることを力説している。彼女の発言は、明くる12年1月に学会の紀要に載り、その翌月には看護の専門誌に転載された。⁷⁰⁾ 彼女は、企業の医療部門は採算が合うとの雇主の台詞を引用しながら、医師と看護婦を雇用することの「経済的価値」を説いた。慈善の香りは微塵もなく、“factory nurse”という言葉を使って新しい看護婦像を提示している。なお、誤解のないように付け加えておくと、ウォールドは医師と看護婦の両方の必要性を説いており、看護婦だけを売り込んでいたわけではない。当時は産業医も、大企業における安全運動の興隆を背景に、負傷者を慈善の対象とする時代ではないとして、専門的な医療サービスの必要性和正当性を売り込んでいた。⁷¹⁾

看護関連文献を網羅的に調べてみたところ、“industrial nursing”の語は1913年には、広

⁷⁰⁾ Lillian D. Wald, "The Doctor and the Nurse in Industrial Establishments," *Proceedings of the Academy of Political Science in the City of New York* 2, no. 2 (January 1912): 41-46; *American Journal of Nursing* 12, no. 5 (February 1912): 403-408.

⁷¹⁾ Wm. O'Neil Sherman, "The Recognition of the Surgeon in Industrial Operations," *NSC Proceedings* 1 (1912), 291-97, esp. 295 and 297.

く使われるようになっていた。同年4月に、NOPHNの機関誌『季刊公衆衛生看護婦』が産業看護の特集号を発行している。⁷²⁾ この雑誌をひもとくと、“industrial visiting nurse”や“factory nurse”の語が混在しているが、時間の篩にかけられて、“industrial nurse”に収斂していく。「組織的な安全運動」の創始企業U.S.スチール社（United States Steel Corporation）の広報活動も産業看護婦の存在を周知させるのに一役買った。アメリカ鉄鋼協会の『月報』1913年2月号には、“industrial nursing”という言葉こそ使われていなかったが、訪問看護婦の写真がたくさん掲載されていた。同協会の福利委員会事務局長トマス・ダーリントン（Thomas Darlington）が巻頭論文を寄せ、訪問看護婦の雇用は「もっとも優れた意味での投資」だと述べている。⁷³⁾

間もなくして自ら“industrial nurse”を名乗る看護婦も現れた。ニュージャージー亜鉛会社（New Jersey Zinc Co.）で働いていたフローレンス・ヒューズ（Florence Hughes）はそのひとりである。彼女は1915年の第4回全国安全大会において、産業看護婦には病院勤務の看護婦とは異なる特別の訓練が求められると主張している。

第一の資格要件は、あらゆる特殊技能職と同様、看護婦がしっかり教育を受けていることです。このようなことは当然すぎてあえて口にするのではないとお考えかもしれませんが、決してそうではありません。私がいいたいのは、単に看護専門職の分野でしっかり

教育を受けているということではないからです。病院での専門的訓練に加えて、産業福利看護婦（industrial welfare nurse）は、ソーシャル・ワークについて訓練を受けており、さらには地域看護（district visiting）についても訓練を受けるべきで、もしも看護婦が産業における福利活動の推進に重要な役割を担おうとするなら、この両方の仕事に適性がなくてはなりません。⁷⁴⁾

この史料について補足しておこう。同時代の訪問看護リーダーたちは産業看護婦の資格要件についてさかんに発言しており、その中には、新米の看護婦に対して、産業看護の仕事に安易な期待を抱くことのないよう忠告する文章も多かったが、ヒューズの文章はそれではない。これは自己研鑽の姿勢を装った巧みな売り込み文句であって、新しい産業看護婦像の提示にほかならなかった。彼女は次のように言葉をついでいる。「現代的な雇主はたいいてい広いところの持ち主であり、生活に満足している健康的な労働者はよい働きをするということを知っています。健康的で満たされた男女を獲得する道は、産業改善と実践的な福利活動を組み合わせることだけなのです。」⁷⁵⁾ いうまでもなく「広いところ」というのは現状説明の台詞ではない、そのようなところを持った「現代的な」雇主を目指せ、という激励の言葉であり、そのためには「実践的な福利活動」の担い手である産業看護婦を雇用せよとのセールス・トークであった。

メトロポリタン生命保険会社との協働 全米の訪問看護婦協会は1910年代に“industrial nurses”の供給体制を整えていくことになるが、この面ではなはだ大きな役割を果たしたの

⁷²⁾ Editorial, “Industrial Nursing,” *Public Health Nurse Quarterly* 5, no. 2 (April 1913): 8-10. ここでは社説だけを挙げておくが、この号全体を参照のこと。

⁷³⁾ Thomas Darlington, “The Trained Nurse in Welfare Work in the Iron and Steel and Allied Industries,” *Monthly Bulletin of the American Iron and Steel Institute* 1, no. 2 (February 1913): 33-50.

⁷⁴⁾ Florence Hughes, “The Vital Importance of the Trained Nurse in Industrial Welfare Work,” *NSC Proceedings* 4 (1915), 133.

⁷⁵⁾ Hughes, “The Vital Importance of the Trained Nurse in Industrial Welfare Work,” 138.

表1 メトロポリタン生命保険会社の訪問看護サービスの成長

会計年度	依頼件数	訪問回数	訪問看護サービスが なされた都市およびタウン	年間総支出 (ドル)
1909	4,723	28,442	13	13,685.37
1910	31,369	290,963	213	127,368.41
1911	74,391	658,424	852	295,142.07
1912	125,310	938,673	1,368	429,604.86
1913	175,942	1,127,707	1,652	525,856.64
1914	192,335	1,060,288	1,804	527,861.64
1915	202,659	1,078,863	2,001	553,900.10
1916	221,566	1,189,828	1,862	612,935.72

出典: Lee K. Frankel and Louis I. Dublin, "Visiting Nursing and Life Insurance," *Quarterly Publications of the American Statistical Association* 16, new ser., no. 122 (June 1918): 59, table I.

がメトロポリタン生命保険会社 (Metropolitan Life Insurance Co.) との共同事業である。これよりリアン・ウォルドの優れたビジネス・センスの賜物であった。彼女は、1909年6月、労働者階級向けに開発された小口の健康保険商品、簡易生命保険 (industrial insurance) の契約者に対して看護婦の派遣サービスを組織してはどうかと持ちかけた。メトロポリタン社はこの提案を好意的に受けとめ、社内に訪問看護婦部 (Visiting Nurse Department) を立ち上げ、とりえず試験的な規模で様子を見ることにした。ニューヨーク市での試行が成果をあげたことから、すぐに事業拡大の方針が決定され、1912年には全米589箇所に看護婦の派遣拠点となる看護センター (nursing centers) が設置された。1914年には、表1に見るように、米国とカナダ合わせておよそ1,800の都市およびタウンに事業展開しており、「幾百万という労働者、女性、子どもに産業衛生と家庭内の衛生について教育」できるようになった。⁷⁶⁾ なお、

この保険商品は、大企業の私的福祉に対する代替案となる可能性を秘めていたが、同時に、雇主が保険契約者になれば私的福祉のアウトソーシングに転化してしまう、両面価値的な性格を有していた。

この共同事業は、ウォルドの思惑をはるかに超えて進展し、訪問看護婦協会の組織とマネジメントの近代化に決定的な影響を及ぼすことになる。もともと「草創期の訪問看護婦協会は貧者の中でのみ仕事をしていた。協会の目的なり目標は、家計が苦しくて専門的な看護を受けられない貧者の家庭にそれを届けることであった。これが慈善活動であるという事実がとても大切であり、当時の看護婦は患者から支払いを受けることを認められていなかった。」⁷⁷⁾ これに対して、メトロポリタン社はNOPHNと協力態勢を築き、看護の仕事に高い専門職性と責任感を要求するとともに、看護料金の徴収システムを確立して訪問看護サービスを慈善から切り離すことの大切さを周知させた。看護センターの

⁷⁶⁾ Ella Phillips Crandall, "A New Extension of Visiting Nursing," *American Journal of Nursing* 10, no. 6 (January 1910): 236-39; Philip P. Jacobs, "Welfare Work of the Metropolitan Life Insurance Company," *Survey* 24 (August 13, 1910): 705-7; Alice H. McCormac, "Industrial Nursing: Welfare Work and Nursing Service of the Metropolitan Life

Insurance Company," *American Journal of Nursing* 17, no. 3 (December 1916): 234-37; Mrs. Codman's speech, June 5, 1916, in *Public Health Nurse Quarterly* 8, no. 4 (October 1916): 97-98.

⁷⁷⁾ Annie M. Earley, "Paid Visiting Nurse Service," *American Journal of Nursing* 22, no. 11 (August 1922): 889.

設置は、既存の訪問看護婦協会と契約をかわすのを基本とし、新設の協会の場合には、その活動内容がメトロポリタン社の要求水準に達した時点で契約を結んでいる。こうして全米およびカナダの訪問看護婦協会は、看護婦の合理的な派遣方式やコスト計算を学んだのである。

看護記録の標準化もメトロポリタン社の働きかけがなかったならもっと遅れていた、というのが看護婦たちの偽らざる反省の弁である。標準化という考えはビジネス・マネジメントの基本思想のひとつである。メトロポリタン社のリー・フランケル（Lee K. Frankel）は、訪問看護婦に対してマネジメントの視点を身につけるよう意識改革を迫った。看護婦の集まりでなされた彼の報告タイトルには、メトロポリタン社の要求が奈辺にあるのかが簡潔に表現されている。NOPHNの第1回大会では「ビジネス組織の視点から見た訪問看護」、アメリカ看護婦協会第18回大会では「訪問看護婦の作業標準」とある。看護記録は1911、12年頃までまったく標準化されていなかった。そこでフランケルは、看護記録の標準化に向けて、作業の進め方を具体的に指南している。全国組織が音頭を取って標準化委員会を立ち上げ、用語の統一について話し合いの場を設けること、普段なにげなく使っている言葉に反省の目を向け、たとえば、全快（cured）、回復（recovered）、改善（improved）がどのような結果（result）をもたらした状態を意味するのかを明確に定義するよう求めた。⁷⁸⁾

⁷⁸⁾ “Nursing News and Announcements,” *American Journal of Nursing* 13, no. 9 (June 1913): 713; Lee K. Frankel, “Standards in Visiting Nurse Work,” *American Journal of Nursing* 15, no. 11, Proceedings of the Eighteenth Annual Convention of the American Nurses’ Association, Held at the First Congregational Church, San Francisco, California, June 20-25, 1915 (August 1915): 984-95, esp. 989; Lee K. Frankel, “Standardization of Financial Statements for Visiting Nurse Associations,” *Public Health Nurse Quarterly* 8, no. 3 (July 1916): 67-72; Winifred L. Fitzpatrick, “Report of the Meetings of the National Organization for Public Health Nursing, San Francisco, June 20-27, 1915,” *Public Health Nurse Quarterly* 7, no. 4 (October 1915): 19.

訪問看護婦たちは経済問題にも目を開くようになった。1913年末からの景気後退に起因する大量失業の時期に、メトロポリタン社によってロチェスターの失業調査が実施され、こうした取り組みを契機にして看護婦たちは産業企業の雇用問題に関心を持つようになる。この手の調査が可能となったのも看護記録の標準化のおかげであった。⁷⁹⁾

医師との戦い 看護婦たちは、このようなビジネスライクな視点を持ち、慈善に距離をとり、用語の標準化をすすめることで、初めて、医師と対等の会話が成り立つということにも気づかされた。そもそも看護記録の標準化は、当時、医学界で進展していた医療データの標準化という大きな流れの部分現象として位置づけることができる。医療データの標準化が求められた背景事情について、オハイオ州保健省のエモリー・ヘイハースト（Emory R. Hayhurst）は4つ指摘している。(1) 州の疾病保険運動の拡がり。(2) 業務上の疾病に対する訴訟が増えていること。(3) 陪審員や法廷は労働者災害補償法上の「負傷（injury）」概念に職業病を含めるようになったこと。(4) 能率技師（efficiency men）や産業経済学者（industrial economists）が労働者の健康問題を調査するようになったことである。⁸⁰⁾ このような背景事情は、産業看護婦の仕事の上にも等しく影響を及ぼしていた。

医師と対等な会話が成り立つというのは、互いに友好的な関係をたもつためという側面もちろんあったが、産業看護を目の敵にしている医師たちの批判をかわすためにも不可欠であった。産業看護婦は1人で活動することが多く、

⁷⁹⁾ McCormac, “Industrial Nursing,” 234-37; Editorial Comment entitled “The Meetings at Atlantic City,” *American Journal of Nursing* 13, no. 11 (August 1913): 824.

⁸⁰⁾ Emory R. Hayhurst, “Standard Forms for Recording Medical Data,” *NSC Proceedings* 4 (1915), 407.

そのために医師の仕事を奪っているとの批判が絶えなかったからである。だが、これは単なる言いがかりという面もあった。訪問看護運動の先覚者が指摘しているように、医師は小さな怪我の治療や少女のヒステリアにフルタイムでおつき合いするのに抵抗があり、それで企業の方では、やむなく看護婦で穴埋めするケースが少なくなかったのである。⁸¹⁾ また、中小の雇主の場合、医師を雇用する財政的な余裕がなかったという事情もある。なにはともあれ、「看護婦を批判しようと待ち構えている人がいるし、しかも建設的な気持ちの持ち主ばかりとは限らない」と、フローレンス・ライトは注意を喚起し、了見の狭い医師への具体的な対処法を専門誌上に公開した。「記録をとることによって、看護婦がそれぞれの症例について何をしたのかを示すべきである。応急手当によって何をしたのか、労働者にどのようなアドバイスをしたのかを示すことは大切なことだ。豊富な記録によって対策が限られていたことが分かれば、看護婦が医者地位を奪っているといった批判をかわすことができるはずだ。」⁸²⁾ 訪問看護リーダーたちは、産業看護という専門領域を確立すべく動いていたが、この専門職を育てるのは容易なことではなく、隣接する専門家との戦いという難題をも抱えていたのである。

以上のような時代の動きを勘案するならば、訪問看護リーダーたちが従来の産業看護婦のあり方に反省の目を向け、新しい産業看護婦像を提示するようになったのは決して偶然ではなかったことがわかる。ここで検討したことがらを念頭において、いまいちど本節冒頭に紹介した新時代の到来を見据える訪問看護リーダーたちの

台詞を読み返すと、時代の要求に積極的に応えなければ産業看護に未来はないという切実な危機感の表現としても読むことができるのではあるまいか。

新しい起源の効用 そして、このような折も折、産業看護の歴史的起源がもっと前に溯るという新事実が発見されたのである。当時の訪問看護リーダーたちにとって、ヴァモント・マーブル社の企業努力は、1910年代に誕生した“industrial nursing”の援軍に思えたに違いない。なぜなら、新しい「起源」は役に立ったからである。たとえば、マサチューセッツ州労災法の修正条項(1919年5月1日発効)は、看護婦の仕事として怪我をした時の応急手当しか規定しておらず、産業看護の実情を理解していないこのような規定は、看護婦の法的立場を危うくすることになった。そのためにウォーターズは新しい「起源」を引き合いにだして訴えている。

ヴァモント・マーブル社は時代のはるか先を行っていました。この会社は、自社従業員に対する応急治療だけではなく、従業員とその家族に対するホーム・ケアはもとより、病院サービスまで提供していたのです。⁸³⁾

ヴァモント社の事例は、新しい産業看護婦像を提示する上でも、時代の法制化運動の行き先を照らす上でも、産業看護婦の仕事範囲を広げるための説得材料としても、まことに好都合な参照軸になったのである。しかし、この起源を発見する際の手続きに何かしら問題はなかったであろうか。最後にこの点について考察することにして。

⁸¹⁾Wald, “The Doctor and the Nurse in Industrial Establishments,” 44.

⁸²⁾Florence Wright, “The Value of the Industrial Nurse’s Records to Herself and to Her Employer,” *American Journal of Nursing* 17, no. 12 (September 1917): 1171-72.

⁸³⁾Waters, “Industrial Nursing,” 728-29.

5. 創成物語の非神話化

神話の成立 理想とされる産業看護婦像が変化する度に、歴史への関心が高まり、その都度、産業看護のより古い起源が新たに発見されてきたことが分かった。訪問看護リーダーたちの書き物を丹念に読みほぐすことで、初めて見えてきた事実である。彼女たちが、試行錯誤しながら歩んできた道をそのまま辿り、本人に創成物語をもう一度最初から作ってもらうかたちで、創作過程を再現したのである。そうすることで、本人にも見えていなかったことがらが明らかとなる。しかし、「真実は偽りよりも残酷」ということがままある。この事実をひとたび知ってしまうと、創成物語への疑念を抑えることができない。あまりにもタイミングよく新事実が発見されているからである。

今日信じられている産業看護の創成物語は半ば「神話」だと言ってよいだろう。もとより神話だからと言って、嘘だということにはならない。結果から歴史を再構成するかたちの物語は、確かな典拠に基づいて、厳密な実証がなされていたとしても、必ず神話の要素を孕むものなのである。神話というのは、歴史研究のアナロジーで言い換えるならば、過去を見る手続きのひとつにはかなならない。すなわち、参照すべき史料を限定し、意図的に視野を狭めることによって、物語の起源を絞り込む手続きのことなのである。訪問看護リーダーたちがおこなった作業も、まさしくこのような手続きであった。そして、急いで付言しておきたいのだが、学問的な歴史研究も多かれ少なかれこうした要素を持っている。両者の違いは、この手続きに自覚的であったか否かだけである。

産業看護の創成物語の原型は、最初期の訪問看護リーダーたちの記憶と身の回りでの見聞に基づいて構成されたもので、1920年頃に出来上がった。その後、引用と孫引きが延々と繰り返され、さらには、区切りの年の記念式典で盛大

に顕彰された上に偶然も重なり、物語の創作過程が隠蔽されるに及び、真実さが増し加わって、今日に至っている。神話の神話たる所以は、想像力を限定して、ほかの可能性を効果的に排除する点にある。この点に神話が本来的に有する視野狭窄作用があるのであり、学問の力によってそれは乗り越えることが可能である。本稿で試みたのは、このような非神話化の作業であり、その最後の詰めを以下でおこなう。

非神話化の方法 本稿の非神話化の手続きで特に留意した点は、“industrial nursing”の理想や表象がどのように構築されてきたのかに一貫して注目することであった。具体的には次の二つの疑問に答えることであった。

第一の問いは、“industrial nursing”という言葉は、いつ、いかなる理由で、誰が使いはじめたのか。看護文献の網羅的な検討によれば、この言葉の使用は1909年以前にさかのぼることができない。本稿冒頭の引用句に見るとおり、“factory nurse”の初出は1910年であり、1913年頃には“industrial nurse”に用語が統一されつつあった。労働者災害補償法と労災保険法が州から州へ矢継ぎ早に制定される中、訪問看護運動のリーダーたちが新しい職業領域としてビジネスの分野を強く意識し、これを一個の専門職として確立しようと考え始めた時である。したがって、“industrial nursing”という言葉は、その出自を訪ねるならば、専門職業家たんとする者たちが、自己の専門的サービスの必要性を説得するための売り込み文句、新しいビジネス・チャンスを開くためのツールであり、その仕事領域が社会に広くアピールする可能性を有していたことから、社会運動のスローガンであり、時代の要請に応えようとの自覚のあらわれという性格をも有していた。

第二の問いは、“industrial nursing”の歴史はどのように発見されて、再構成されてきたのか。最初期の歴史記述は訪問看護リーダーた

ち自身の手で、1916年頃に開始された。職業的なチャンスを切り開こうとの「現在」の取り組みを支えてくれるであろう史実を見つけようとしていた。また、望ましい「将来」を引き寄せるのに好都合な史実を求めていた。つまり、現在のチャンスの開拓および将来への希望から「起源」を再構成する方向で、無意識のうちに、史料を取捨選択していたのである。もとより歴史を改竄しようという気持ちなど毛頭なかったであろう。看護は善意の働きであると信じており、過去を振り返る作業もその一環であった。このような信念に突き動かされていたからこそ、自己的方法的立場に少しも疑問を抱かず、むしろ当然視することができたに違いあるまい。史料の出典を明記していないのも、そもそも史料を取捨選択しているという自覚を欠いていたためではあるまいか。

かくして、無意識のうちになされていた史料の取捨選択のプロセスを明らかにすることができれば、創成物語が依拠している暗黙の前提を明るみに出すこととなり、ひいては訪問看護リーダーたちが思い描いていた産業看護の将来像をも解明することができるであろう。しかし、彼女たちは、史料選択をしているという自覚を欠いており、その当然の結果として、なにも語っていない。語っていないことがらを解明するためには、史料選択の場面を仮想して、彼女たちの思いを想像してみる以外にないであろう。以下では、19世紀に開始された産業看護の具体的なケースを素材にして、思考実験を行なうことにしよう。

非神話化の思考実験 思考実験の素材として、コロラド・フュエル・アンド・アイアン社 (Colorado Fuel and Iron Company) のミネクア病院を取りあげてみたい。CF&Iは、1880年にコロラド州プエブロにミネクア製鋼所の建設を開始し、翌81年にシカゴから外科医を招聘して医療部門 (Medical Department) を立ち

上げた。この時、シカゴの聖ルカ病院からC. J. キャストホーム (C. J. Kastholm) はか数名の男性看護師を招いている。当時のプエブロは見渡す限りの草原で、ところどころに農場が点在するフロンティアの片田舎であった。厳しい環境の中での過酷な労働になるのは目に见えており、CF&Iが男性看護師を招いたのも、それを慮ってのことであっただろう。以来、1897年まで同病院は男性看護師に頼ってきた。⁸⁴⁾ この史実が、創成物語にある最古の事例よりもさらに溯るのは言うまでもない。学的反省の立場から言えば、産業看護史の一章として当然書き加えられるべき出来事であるが、今日の通説からは排除されている。史料選択の場面を想定して、排除の論理を浮き彫りにしてみよう。

当時の訪問看護リーダーたちの置かれていた情報空間を再現してみるなら、彼女たちがCF&Iミネクア病院について知っていた可能性はきわめて高い。訪問看護運動の主要な全国メディアは、1900年10月に創刊された*The American Journal of Nursing*であり、しばらくの間はこの一誌しかなかった。向上心のある看護婦たちは熱心に目を通していただろう。1901年、CF&Iの医療部門はこの雑誌の紙面を借りて看護婦を募集し、4名の看護婦の獲得に成功している。また、1910年12月号に掲載された小さな記事には、CF&I医療部門の発行する報告書について、好意的なコメントを載せている。「いつもながら、美しい写真の入った興味そそられるブックレットであり、ミネクア病院およ

⁸⁴⁾ “The Medical Department of the Colorado Fuel and Iron Company,” *Camp and Plant* 1, no. 8 (February 1, 1902): 105-20; Jennie S. Cottle, “Modern Trained Nursing,” *Camp and Plant* 3, no. 2 (March 21, 1903): 248; “Memories of Early Days at Minnequa,” *Industrial Bulletin* 2, no. 1 (October 31, 1916): 12-14. この三史料はいずれも企業内文書を利用し、具体的な日付を調べて、丁寧にまとめられている。訪問看護リーダーたちが過去を振り返りはじめた1916年までに発行されていたことを付言しておきたい。

び附属看護学校について豊かな情報を与えてくれる」と。同社のブックレットは、雑誌編集部の手帳には当然備えられていたであろうし、看護婦たちの間で廻し読みされていたことも十分に考えられるのである。⁸⁵⁾

だが、訪問看護リーダーたちがこの史実を知っていたかどうかは括弧に入れて、次のような思考実験をしてみたい。彼女たちが、CF&Iの史実に出会った時の情景を思い描き、ミネアポリスの事例を“industrial nursing”の起源として位置づけようとの考えが湧いてくるか否か、本人に答えてもらおう、というものである。彼女たちの思いに寄り添うとともに、彼女たちをとりまく意思決定環境をいきいきと思い巡らし、仮想的な史料選択の場面に立ち会うことで、彼女たちにしてみれば当然すぎてあえて語る必要を感じていなかった認識枠組、史料選択の基準を浮き彫りにする。

第一に、CF&Iが最初に雇用した看護師は男性であったが、この事実だけでも、CF&Iの事例を“industrial nursing”の起源として取りあげることに抵抗を覚えていたことであろう。訪問看護リーダーたちは、フローレンス・ナイチンゲールがかかげた「女性専門職」の理想を共有しており、これは“industrial nursing”という概念の中心思想のひとつでもあった。⁸⁶⁾ とはいうものの、自己の信念はどうあれ、CF&Iの看護師たちを男だからという理由で歴史

記述から排除するとしたら、それはそれで、彼女たちの良心が痛むことになり、避けなければならなかったであろう。しかし、この問題を訪問看護リーダーたちは、意識的にか、無意識的にか、上手にクリアしていた。

まず、“industrial nurse”の定義が1920年に定められたことを押さえておこう。そしてこの定義に男女平等が謳われていたことも。同年に開催されたNOPHNアトランタ大会において、産業看護部会が創設され、そこで定義が定められた。この定義には正規の看護教育を受けた登録看護師であれば男女の別を問わず“industrial nurse”であると明記されている。⁸⁷⁾ 実際、産業看護の分野では重労働が求められる場面がままあり、男性看護師が求められていたと考えられるので、これは現実的な定義である。⁸⁸⁾

しかし問題は、訪問看護リーダーたちの歴史に対する姿勢、ものの見方にある。1920年の定義をそのまま19世紀に持ちこんで、この定義に当てはまる看護実践だけを“industrial nursing”だと判断していることだ。もちろん、この判断基準を公にした上で、結論を提示するのなら、それはそれでひとつの立場だと言えなくはない。しかし、この定義を知っていたのは公衆衛生看護サークルの内部者だけで、外部の者は知らなかったし、歴史記述に際してその定義を参照軸にしている旨を記したとしたら、その場合、どのような史実が漏れてしまうのかについて併せて記述する必要がでてくる。もしも訪問看護リーダーたちがこのような歴史学的な感性を持っていたとしたら、次のような一連の事

⁸⁵⁾ Jennie S. Cottle, letter to the editor, *American Journal of Nursing* 2, no. 3 (December 1901): 232; “Hospital and Training-School Items,” *American Journal of Nursing* 2, no. 5 (February 1902): 369-70; “Nursing News and Announcements,” *American Journal of Nursing* 11, no. 3 (December 1910): 226.

⁸⁶⁾ ちなみに、看護婦一般を広く集約する目的で設立されたアメリカ看護師協会(American Nurses Association)は看護婦の協会であって、男性の入会を認めるのは1930年の規約改正後のことである。Susan Barrett-Landau and Sharon Henle, “Men in Industry: Their Influence in a Female Dominated Career,” *Journal for Leadership and Instruction* 13, no. 2 (Fall 2014): 11.

⁸⁷⁾ Stella Fuller, “The Atlanta Convention,” *American Journal of Nursing* 20, no. 9 (June 1920): 721-22.

⁸⁸⁾ 企業の医療部に雇用されている看護師の男女構成はほとんど分かっていない。たまたま見つけた史料だが、ソルヴェイ・プロセス社が1902年6月にデトロイトで創設したソルヴェイ総合病院の附属看護学校では、2名の男性看護師と8名の看護婦が学んでいた。“Training School Notes,” *American Journal of Nursing* 7, no. 7 (April 1907): 577.

情を意識しなければならなかったはずである。CF&Iの看護師キャストホームらが働いていたシカゴの聖ルカ病院は1864年に創設されたが、同病院に看護学校が置かれるのは1885年である。⁸⁹⁾ つまりキャストホームの時代には看護学校そのものが同病院にはなかった。米国全体を見わたしてみると、男性看護師の養成は1888年、ニューヨークのベルヴュー看護学校で始まるが、20世紀に入るまでここ以外に男性向けの教育プログラムは存在しなかった。⁹⁰⁾ 加えて、男性看護師に対する偏見があり、州によっては男性の看護師登録を受け付けていないところもあった。「正規の看護教育」「登録看護師」という二つの条件を満たす男性看護師は19世紀段階では皆無に近かったであろう。つまり、1920年の定義を過去にあてはめて歴史を再構成する方法を採れば、ほぼすべての男性看護師を、性差別的な言辞を弄することなく、否むしろ、男女平等を謳いながら、創成物語から効果的に排除できるのである。すでに見てきたとおり創成物語の原型が出来上がるのは1920年頃である、ということは、意地の悪い見方かも知れないが、物語の成立と同時にタイミングよく“industrial nursing”の定義が定められ、それを史料選択の基準にすることができた。

第二に、CF&Iミネクア病院は立地上の理由

⁸⁹⁾ Rush Medical College, “Rush History, First Medical School in Chicago,” accessed August 29, 2019, <https://www.rush.edu/about-us/about-rush-university-medical-center/history>.

⁹⁰⁾ Sandy F. Mannino, “The Professional man Nurse: Why He Chose Nursing, and Other Characteristics of Men in Nursing,” *Nursing Research* 12, no. 3 (July 1963): 185; Jean Spencer Felton, “Men in Occupational Health Nursing,” *Occupational Health Nursing* 18, no. 1 (January 1970): 9; “Reports of County Visiting Committee,” and John W. Brannan’s remarks, in New York State, State Charities Aid Association, *Thirtieth Annual Report of the State Charities Aid Association to the State Board of Charities of the State of New York* (November 1, 1902), 69-71, 123.

から充実した医療態勢を築くことになったが、訪問看護リーダーたちの目には、あまりにも立派すぎると映ったのではないか。20世紀の初頭には、38名の外科医と医療スタッフを擁し、コロラド、ワイオミング、ニューメキシコの3州に広がる38の炭鉱および製鋼所の従業員とその家族、合わせて6万人のケアにたずさわる大病院へと発展した。同時代の文献は「西部で最良の設備を整えている」との評判を書きとどめている。⁹¹⁾ しかし、訪問看護リーダーの目には、大規模な社立病院に勤務する看護婦は、“industrial nurses”には見えなかったことであろう。病棟看護婦は、男性医師の指図に従って職務を遂行するのが生業であり、男女役割分業の中で従属的な地位に置かれていたからである。訪問看護リーダーが念頭においていた産業看護婦の仕事風景というのは、みずからのイニシアティブで行動する自立的な姿であった。⁹²⁾ とくに東部や中西部の都市近郊に立地する企業の場合、近隣の医療インフラに支えられて、雇用する産業看護婦の数は少なくすんだから、こうした思考傾向に拍車がかかったと考えられる。そして、ほかでもない、このような自律的な仕事風景こそ、強烈な専門職業主義と“industrial nursing”という概念を育む土壌となっていたのである。訪問看護リーダーたちの史料選択には、東部の医療インフラのありようが無意識のうちに前提されていたと考えられる。

第三に、反組合主義の些CF&Iとは社会思想的に反りが合わなかっただけでなく、新時代の産業看護婦像を提示する上で都合が悪かったであろう。もともと訪問看護運動はセツルメント

⁹¹⁾ W. J. Ghent, *Benevolent Feudalism* (New York: Macmillan Co., 1902), 61.

⁹²⁾ 具体例を挙げるなら、リリアン・ウォールドは、ニューヨークで訪問看護をはじめの際、病院、診療所、個人医師と関係なく活動をはじめた。Mary Buell Sayles, “The Visiting Nurse and the Nurses’ Settlement,” *Outlook* 81 (October 21, 1905): 421.

ハウス運動と同じ方向を向いて歩んできた。そしてセツルメントの多くは労働組合運動を支援していた。⁹³⁾ これに対して訪問看護婦協会は、それほど組合に対する態度を明確にしていなかったし、総じて大企業とも友好的な関係を築いており、とくに産業看護婦にその傾向が強かった。しかし、ことCF&Iについては事情が違っていた。訪問看護リーダーが、産業看護の起源を調べはじめた1916年頃、CF&Iの炭鉱キャンプで起きた「ラドロー」の惨劇はまだ記憶に新しく、労使紛争を収めるために導入されたロックフェラー・プランも評価が定まっていなかった。⁹⁴⁾ また、この労使紛争を通じて、会社の医師が労働者の個人生活に介入している点が問題視されていた。挙げればきりが無いが、当時の訪問看護リーダーの目には、産業看護の起源としてCF&Iに言及することには心理的な抵抗が大きかったであろう。まして「労使間の通訳者」という新時代の産業看護婦像を提示する時に、激烈な労使対立のあった企業を取りあげるなど考えられなかったはずである。

第四に、CF&Iは西部の企業であり、これを産業看護の起源として取りあげるとなると、ニュー・イングランド発祥説という訪問看護リーダーたちの常識的なものの見方と齟齬を来すことになる。第3節で詳述したので、多言を要すまい。

今後の課題 産業看護の歴史を学問的な視点から再構成しようとするなら、以上のような史料選択の基準をひとまず括弧に入れて、19世紀後半における産業医療と産業看護の大きな広がりや再検討しなければならないだろう。これまでの考察を踏まえるなら、新しい産業看護史は次のような物語になるのではないか。その予

想図を描くかたちで今後の課題を提示しておきたい。

第一に、19世紀の産業看護の世界は、従来知られているよりもはるかに多彩で、多様性に富んでおり、その特徴は20世紀に入ってからも持続していた。西部には鉄道病院があり、早くから看護婦を雇用していたが、その中には看護修道女が含まれていた。CF&Iのように大病院を創り上げる企業も出てきた。そこには男性看護師の姿があった。人里離れた炭鉱町でも看護婦の雇用は広がっていた。訪問看護リーダーたちの思い描く“industrial nurse”の理想像を無条件に過去にあてはめることなく、新しい目で史料と向き合うならば、このような多様性がおのずと視野の中に入ってくることであろう。

第二に、個々の事例を時代の文脈の中に適切に位置づけなければならない。あまりにも当然すぎる歴史学的な課題だが、この研究領域では一顧だにされてこなかった。たとえば、ベティ・モウルダーを発見した1970年代の歴史記者は全員が看護婦であるが、彼女たちの文章を読むと、モウルダーは19世紀の世界にぽつんと孤立した存在に見え、孤軍奮闘の姿ばかりがイメージされる。だが、現実はそうではない。モウルダーがペンシルヴェニアの炭鉱会社グループで雇用される前の年、1887年から、同州において炭鉱夫による鉱夫病院（miners' hospitals）の設立請願運動が展開し、多くの病院が建設されていくことになる。そこには当然のことながらたくさんさんの看護婦の姿があったはずである。⁹⁵⁾

⁹³⁾ Mary B. Sayles, “Settlement Workers and Their Work,” *Outlook* 78 (October 1, 1904): 304-311.

⁹⁴⁾ John D. Rockefeller, Jr., “Labor and Capital-Partners,” *Atlantic* 117 (January 1916): 12-21; John A. Fitch, editorial entitled “The Rockefeller Plan,” *Survey* 35, no. 6 (November 6, 1915): 147; “Colorado a Year after the Coal Strike,” *Survey* 36, no. 7 (May 13, 1916): 190.

⁹⁵⁾ “A Miners’ Hospital: Hazleton Industrials Asking for State Recognition of Their Necessities,” *Mining Herald and Colliery Engineer* 7 (March 12, 1887): 75; “New Miners’ Hospitals for Pennsylvania,” *Colliery Engineer* 9 (September 1888): 35; “Western Pennsylvania Mining Institute,” *Colliery Engineer* 9 (November 1888): 79; “The Miner’s Hospital at Ashland, Pa.,” *Colliery Engineer* 9 (February 1889): 163; “A Model Hospital for a Mining Town,” *Colliery Engineer* 9 (April 1889): 209. 1915年には58病院を数えた。Frank Hall, “Mining and Humanitarianism,” *Coal and Coke Operator* 13, no. 8 (August 1915): 626.

1889年に開設されたウィルクス・バリ・マーシー病院では、看護修道女が鉱夫の看病ならびに近隣の貧者救済に当たっていた。⁹⁶⁾このような状況の中でモウルダーのケースを眺めると、同州の医療サービスの軸をなした鉱夫病院の流れから外れているだけでなく、彼女は病院のない辺鄙な土地で中小の炭鉱主によって直接雇用されていたのかも知れない。なにはともあれモウルダーだけを取りあげることは、当時の全体状況を無視した、誤った歴史認識に人を導くことになるだろう。

第三に、1910年代の専門職業主義的な“industrial nursing”の成長は、産業看護の多様性を押さえた上で、位置づけ直されなければならない。さまざまな看護観が拮抗している中から、強烈的な専門職業主義をかかげて、自己を他者から切り離していく一群のエリート女性があらわれた。これが“industrial nurses”であり、今日の“occupational health nurses”はその継承者である。時代の流れは専門的な看護教育を重視する方向にあり、それゆえ彼女たちの構想した“industrial nursing”が時代の要求に応えるものであったのは事実だ。しかし、このような将来的な希望を含む現状認識を過去に投影するかたちでまとめられた創成物語は、いわば「正史」であって、他の看護婦や男性看護師の働きを異端として歴史記録から排除する役割を果たしたといえよう。

第四に、ここで検討したわずかな例からも、産業立地と労働災害の頻度の視点から医療・看護サービスの性格を類型化することが可能であり、産業看護のありようも類型化することができそうである。この視点を加味して産業看護の歴史を振り返るならば、“industrial nursing”が優れて東部や中西部大都市の医療インフラに支えられて構想された専門職業だと言え

そうである。そうなれば従来のニュー・イングランド発祥説を相対化する必要が出てくる。

第五に、労使関係の視点を強く意識して、産業看護の歴史を再構成しなければならない。これまでの歴史を見れば、長期にわたって産業平和が実現していることの方が希であり、労使紛争の渦中に投げ込まれる看護婦も当然いたはずである。社立病院が労災事故の隠蔽に使われている例も知られており、そうなれば看護婦もそれに手を貸していたことにはならないか。看護婦たちの経験を丁寧に描き、味わった苦悩に共感しようと思うなら、当事者の気持ちからすれば触れられたくない事案も、歴史記述から外すわけにはいかないだろう。

以上のさまざまな意味において、産業看護の生成は戦いの歴史であったと考えられる。

附記 本稿の初期草稿は、社会政策学会東海部会（2019年12月7日、名古屋経済大学）およびアメリカ経済史学会12月例会（2019年12月14日、明治大学）で発表の機会を得た。参会者の質問とコメントに感謝いたします。本研究は、2019年度学術研究助成基金助成金（JSPS KAKENHI Grant Number JP19K01796）による研究成果の一部です。

⁹⁶⁾Leroux, “In Times of Socioeconomic Crisis,” 121.

